
ゼロの使い魔 ～異世界朧剣忍法帳～

あおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 〱 異世界朧剣忍法帳〱

【Nコード】

N1761H

【作者名】

あおん

【あらすじ】

ハルキゲニアの地に、天地の理を覆す朧流がいざ参る。今、異世界にて切り咲く！！

序章（前書き）

初めて投稿する作品になります。拙い文章になりますが、宜しければどうぞ（＾・＾・＾）ー旦

序章

「我が名は」

「俺の心の中にいるっていったな。なら・・・」
そう言つて彼は己が身に刃を突き立てる。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

「仏様。願わくば、餓鬼畜生六道如何なる身に堕ちようとも、共に添い遂げたいと思います。」

「五つの力を司るペンタゴン」

「虎姫よ、その願い叶えるには、吝かではない。しかし、この男の業、些か強すぎる。」「我の運命に従いし使い魔を」

「故に、業を軽くするために苦難を課す。今、扉が開く。」

「召還せよ!!!」

「再び合間見えることがあるならば、共に在りましょう。其れまでしばしの別れ。健勝に在れ、鬼助。」

第一章巻話

ガゴォウン！！

緑生い茂る広場にて轟音が鳴り響く。

「また爆発か。いい加減にしろよ！耳がどうにかなりそうだ。おまえには無理なんだよ！」

「全く！優雅じゃないわね。まあ、貴女にはそれがお似合いだけだ。」

「よしんば呼べたって、どうせとるに足らない有象無象だろうけど」

「『ねえ？ゼロのルイズ？プツ、くつくくつ、アーツハツハツハ』」

心ない多くの罵倒は彼等の中心にいる桃色の髪の少女に向けられたものだ。

此処は、トリステイン魔法学院。春の使い魔召還の儀式に於いてメイジの卵たる貴族の息子、子女達がそのステータスたる使い魔を召還しているのだ。

桃色の髪の少女、ルイズは多くの罵倒と召還の失敗とも思える爆発に気を取られ、クラスメート達に怒りをぶつけるべく後ろに振り返った。

爆発の中心にある変化を見逃して。

「あなた達、うるさ！待ちたまえ、ミス・ヴァリエール」

彼女の叫びを遮って彼等の講師のジャン・コルベールが爆発の中心、正確には中心に出現した何かに目を向けたまま、彼女を呼び止めた。

「ミスタ・コルベール？どうしたのですか？」

「よく見てみたまえ。どうやら召還には成功しているようだよ」

「ウソ・・・あ、やつ・・・た・・・の？って、アレ？」果たして、そこに倒れているのは青年であつた。

青紫の異国風の装束を身にまとい、顔立ちはまだ幼さが残つてはいるが、その体軀は、引き締まり山野を駆け回る獣を彷彿とさせる。しかし、

「人？変な格好の・・・平民」

その事實は、ルイズを歓喜から絶望へ叩き落とす。

「おいおい、くつ、本気か、ブッフ、ゼロがつひつゼロのルイズが無能な平民をよんだー！？」

「ダツダメつ、無理つ、信じれない。キュツ、ぶつ、アハハハハハ！」如何に鍛えていようとこの世界において平民とはメイジにとつては路傍の石にすぎない。誰もが召還された彼を嘲笑つていた。
「ぐつ、ぬ」

その中で彼は目を覚まし、それに気づいたルイズが近寄る。

「なんで、あんたみたいなの、平民がつ、」

ルイズ自身も彼を見下し、その場のメイジ達がはやし立てる。ただ、一人を除いて。

「ッ、待ちたまえ！ミス・ヴァリエール！」

「どうしたのですか？ミスタ・コルベール」

常ならぬコルベールの剣幕に、ルイズはその場に留まる。

（若い少年、いや青年か・・・しかし、この血臭・・・どれほどの死を、いずれにしても油断するわけにはいかない。）

「つつ、クソツ、どうなつてやがる。」

ゆっくりと立ち上がる青年に対して、コルベールは慎重に尋ねる。

「失礼。私はコルベール、ジャン・コルベールという者だ。名前を

聞いてもいいかね？」

「あつ、ああ、俺は鬼助、鬼助つてもんだ。」

第一章 武話

「ふむ、キスケ君というのかね。状況の説「ちょっとあんた、何であんたみたいな平民が出て来てんのよ!」・・・ミス・ヴァリエール」

「平民? つーか此処は何処なんだ?」

(仏サンと虎姫の会話は臍氣に聞こえてた。つーこたあ、こっから苦難ってヤツがはじまるってことかい。って!!)

「村正は!? 俺の刀は!？」

「ムラマサ? カタナというと東方の「ちょっと、無視するんじゃない! 平民が!!」・・・ミス・ヴァリエール」

コルベールは鬼助から詳細を聞き出そうとし、鬼助は己の状況に混乱し、ルイズは苛立ちを鬼助にぶつけようとする。どうにも話が纏まらない。

「まあ、落ち着きたまえ、ミス・ヴァリエール。彼も状況が解っていないようだし、ゆつくりと話をしていこう。」

「ミスタ・コルベール。しかし、平民が使い魔だなんて・・・」

「そう、平民が使い魔に喚ばれるなんて学園始まって以来だからね。なにが起こるかわからない。」

「おい、勝手に話続けてんじゃねーよ。刀は?」

「済まない。カタナという物については分からない。君が喚ばれた時点では、君しか確認出来ていない。」

そう言うコルベールは未だに笑いながら此方を伺っていた生徒達に向き直る。

「静かに！私とミス・ヴァリエールはこのまま彼と話がある。皆は解散してもよろしい。使い魔と存分に親好を深めたまえ。」

そう言うのと再びルイズと鬼助に向き直る。

「ルイズ？召還出来ても契約出来なきや意味ないんだからな？失敗して平民を、吹き飛ばすなよ！」

「まあ、ゼロの相手は、平民風情で十分でしょ？頑張つて？ぶつ、ククク」

「いやいや、ゼロが相手じゃ平民も契約しないんじゃないか？」

「「「アーツハツハツハ」」」

「あつ、あいつらーっ！！」

「落ち着きたまえ、ミス・ヴァリエール。それに、或いは当たりかもしれないよ？」

その言葉に怪訝な顔をしてコルベールを見るルイズ。そこに、いい加減話が出来ていない鬼助が口を出す。

「おいっ！！いい加減にしやがれ！！話を聞かせてもらっぜ。一かな？」

「ああ、済まない。まずは、そうだな。此処はトリステイン魔法学園、今は春の使い魔召還の儀式を行っていたところなのだよ。」

「使い魔？それにとりすていん？」

「うむ、使い魔とは主人に従い、秘薬を集め、また目となり耳となる。最も重要な物は主人の身を守る事に有る。」「トリステインはこの国のことよ。あんたそんな事も知らないの？」

「知らねえ。聞いた感じからすりゃあ、南蛮あたりか？」

鬼助の推測は当たらずとも遠からずといったところだった。

「ナンバン？カタナのことや服装から察するに君は東方の人では？」
「トウホウ？」

「カタナというのは東方の武器だったはずだ。稀に茶や米なんかの希少品が入ってくる。」

「成る程、そいつあ確かに俺の馴染みのもんだ。つーこたあこつちじゃトウホウっていうのかい。」

「ふーん。あんた東方のヤツなんだ。武器なんか持つてゐること
は平民の兵士って事？」

「さつきから言ってるがヘイミンつたあ、なんだ？随分、見下されてるんだが？」

江戸時代の人間には士農工商の考えがあるため身分の違いは理解しているが平民という考えは無いため鬼助にとっては理解できない。

「はあ？あんたまさか魔法が使えるなんていわないでしょうね？」

「魔法？妖術や方術つてのは見たこたああるが。」

「ヨウジュツ？ホウジュツ？なんだか知らないけど要は使えないんでしょ？だったら平民じゃない。」

「いや、だからだな・・・」

一向に平民の説明にたどり着かない、ルイズと鬼助の会話に、コルベールが助け舟を出す。

「いいかね、キスケ君。魔法と言うのはこうゆうものだよ。」

そう言う短い詠唱後に杖を振る。

「ファイヤーボール！」

魔法名と同時に出現した炎弾は地面にぶつかると周囲を赤に染める。

「こういった魔法を使える者をメイジといい、メイジの大半は貴族として領地の政治を司る。」

「そして魔法が使える無いやつのことを平民って言うのよ。」

ようやく平民の意味とこの世界の政治形態を臆気ながらしる鬼助。

「なるほどな、貴族ってのは大名なんかと同じってことか。」

「そんで大名の姫さんであるそっちの嬢ちゃんが魔法ってやつで護衛を呼んだら俺がきたってことかい？」

今での会話の内容から彼等の目的を推察する。忍の出身である鬼助にとって状況判断能力は必須である。

「おお、理解が早くて助かる。では使い魔、受けてくれるのだね？
実は今回の儀式が成功しなければ彼女は進級出来なかったのだよ。」

「ミスタ・コルベール！？」

「聞きたまえ、ミス・ヴァリエール。使い魔召還の儀式は神聖なるもの。ゲートが開き、なにものかが出現した以上やり直しを認める訳にはいかないのだよ。」

「そんな…平民の・・・」

「キスケ君？了承で良かったのだよね？」

「ああ、かまわねえ。こちらら二度死んだ身だ。是も、縁ってヤツ
だろうな。」

（それに仏サンは苦難っていつてやがったからな。ここは是が非でも、な。）「？ それではミス・ヴァリエール。彼と契約を。」

そう言つてルイズを鬼助の前に呼ぶ。

「うつつ、ほんと、平民なんかこんな事有り得ないんだからね。」

「なにをぶつぶついつて… なっ!!」

重なり合った唇に鬼助は驚愕し、ルイズは顔を紅葉の様に染める。
直後!

「ぬっ!ぐっ、つぁ」

激痛が左の腕を襲う。

「大丈夫かね? ルーンが刻まれる痛みのようなのだが。」

「あつ、ああ。どうやら収まってきた。」

「ふむ。珍しいルーンだ。少し見せてくれたまえ。写生もしておこう。」

そういつてメモを取るコルベールを呆れたような目で見ながらルイズが言う。

「契約がなったのならあんたは私の使い魔よ! 絶対服従なんだからね。」

「あん? まあ、よほど無理じゃない限りは、な。」

答える鬼助。するとメモを取り終えたのか、コルベールは二人に向かって指示を出す。

「おめでとう、ミス・ヴァリエール。契約は成った。寮に戻るなりしてキスケ君と親好を深めたまえ。」

「キスケ君。何か解らない事があったのならいつでも聞きに來たまえ。」

そういつてコルベールは自分の研究室へ飛んでいった。

「行くわよ!」

「オウ。って嬢ちゃんは飛ばないのかい?」

その言葉に足を止めるルイズ。次の瞬間、本日何度目かになる爆音が鬼助を中心に鳴り響いた。

第一章参話（前書き）

あとがきに少しお礼とお願いが少し。宜しければ見ていっして下さい。

第一章 参話

ところ変わって、トリスティン魔法学園生徒寮

「ツーツ、未だに耳がキンキン言いやがる。いきなり攻撃たあど
ういう了見してやがる。」

至近距離の爆発に晒された鬼助は、直撃こそ免れたものの軽くない
被害を被っていた。

「うるさいわねっ！怪我してないならいいでしょ。んで？あんたい
つたい何なわけ？」

「なんだソリヤ？！」

無茶な理屈と意味不明な質問に素っ頓狂な叫びをあげる鬼助。

「だから！あんたは、結局、東方の、兵士で、言い訳？」

どうやら鬼助の詳細が聞きたいらしい。

「ああ、そういうことかい。兵士か。そう言うと言語弊があるな。ま
あ、真っ向から斬り合っても早々に負けはしねえが、実際は忍だな。」

「シノビ？なにそれ？」

「あゝ、そうだな。乱破、草、間諜、どれか解るもんがあるかい？」

「ラッパ？草？間諜って・・・スパイって事！？」

楽器や生い茂る緑を連想しながらも、最後の単語に反応し、驚愕を

持つて鬼助を見る。

「すばいってこてたあ解らねえが、大まかに言やあ潜入したりする事を差す意味なら、大体合ってるはずだ。」

「じゃ、じゃあその、人を・・・」

「ん？ああ、任務とありや暗殺もするし、必要とありやあ兄弟同然の仲間を斬り殺したこともあらあな。」

「そ、そんな・・・」

前触れもなく重くなった空気に、気まづくなった鬼助はふと話題を変える。

「と、ところでだがな、使い魔の役目ってやつだが、さっき言ったみたいに嬢ちゃんが見れば探ってくるぜ。」

「うん…って違う！この場合の目と耳ってことは文字通りあんたの見たもの聞いたことを私も体験できることよ！」

「へえ？驚いた。そんな事、出来るのかい？」

「出来ない・・・わね。・・・きつとあんたが平民だからだわ。そうよ、失敗なんかじゃ無いんだから。」

その理不尽な理屈に呆れ顔の鬼助。

「またそれかい。」

「ウルサイわね！じゃあ次！秘薬なんかは？どうなの？」

「秘薬ねえ？まあ、忍ってなあ性質上単独行動が基本だからな。薬草なんかの調合次第じゃ、止血剤から増血剤、興奮剤に抑制剤、必要とありや火薬に毒薬まで用意してみせようや。」

「ホントに！？凄いじゃないの！！」

思わぬ鬼助の能力に歓喜を示すルイズ。しかし・・・

「ただなあ・・・」

「何よ？なんか問題でもあるの？」

「日の本でも地域によつて薬草の有る無しがあるんだ。南蛮ともな
りやあなあ？」

「つまりダメってこと？」

「いや、似てる効能が解りさえすりゃあ、な。」

「そう。じゃあそれは後で考えるところとして、次！これは最も大切なこ
とよ！あなたは私を守れる？」

「ああ、そのことかい。なら問題ねえ。我が臍流、刀さえありゃあ
どんな難敵だろうが斬り伏せて見せようや。」

その威風堂々とした物言いに柄にもなく心の中で顔を赤くするルイ
ズであつたが、口にでるのは辛辣な一言。

「ふ、ふん！大きく出るじゃない。でも、そのカタナって武器、持
つてないんでしょ？」

「ぐっ」

「詰まり、あんたは今使い魔としてなににもできないって事じゃない
の！」

流石ツンデレ、容赦ない。

「まあ、返す言葉あ無いんだが……。嬢ちゃん、もう少し齒に布
着せようや？」

「嫌よ。使い魔を甘やかすのは良くないわ？」

「初っ端から厳しいのも問題だと思うがね？」

渋い顔でグチを漏らす鬼助。

「ウルサイわね！でも、まあ平民にしてみれば有能な訳だから？褒
美を上げるのも吝かじゃないわ？」

「褒美？」

「そう。次の休みに武器屋に連れてってあげるわ。感謝しなさい？」
「有難てえ。村正程たあいわねえが、刀さえありゃあ当面問題はねえ。」
「最初の時も言ってたけどムラマサって何？聞いた感じだとカタナの一種なわけ？」

「ああ、村正ってなあ刀の銘だ。その昔、千子村正ってヤツが鍛えた刀よ。その切れ味たるやこの世に切れぬものはなく、その威力たるや天神地祇をも脅かすってなしるもんだ。」

「なっ……」

その余りに凄まじい謳い文句に絶句するルイズ。

「他にも例えば、世に出れば徳川、こいつは日本の王みたいなもんだが、こいつに仇をなし一度抜いたら血を見るまで収まらぬってな言葉もある位だ。」

「思いつきり呪いの魔剣じゃないのよ！？あんた大丈夫なの？」

「ああ、臙流は妖刀神刀関係なく従える。問題はねえ。」

その余りにきつぱりとした物言いに呆れつつまどを見るルイズはあることに気づいた。

「ちよつと、もうこんな時間なわけ！？夕御飯食べ損なつたじゃないのよ！」

「いきなり叫ぶなよ。ったく、一食抜いたぐらいじゃどうにもならねえよ。」

実際鬼助は一食どころか二日抜いても動いてみせる。まあその分食べるときは凄まじい食欲を見せるが。その量たるや、食事処の品を無くしてしまう程だ。

しかし、そんな事はルイズには関係がない。

「なにバカなこといつてるのよ！あんたのせいでしょ！？」

「俺のせいって……あゝ解った解った。なんか食いもん貰ってき

てやるよ！つたく」

そう言つて窓に手をかける鬼助だが、次の瞬間微動だになくなる。

「ちよつと、キスケ？あんたどうしたの？」

「馬鹿な・・・」

「何なのよ！？」

「月が・・・二つ・・・だと？」

狗神をも斬り伏せる臆の忍が、呆然と見上げる夜空には二つの月が煌々とハルキゲニアの大地を照らしていた。

第一章参話（後書き）

本日、はじめて感想いただきました。いや、言外嬉しいもので。書き始めた以上、完結にむけ精進する所存です。今後ともご愛顧、よろしく願います。

第一章四話

「はっ、ははは…おいおい、嬢ちゃんありやなんだい。」

乾いた声で聞く鬼助に、訝しげな顔をしながらも空を目をやり、不思議な質問をする己の使い魔を、少しかわいそうなものを見る目で見やりながら答える。

「何って、月に決まってるじゃないのよ？まさか東方には月が無い、とでもいうの？」

「月はあるさ。だが夜空に浮かぶのは一つただけだぜ？じゃなきゃかぐや姫が帰るとき迷っちゃまうじゃねーか。」

「カグヤ姫ってのが誰だか知らないけど、西に行こうが東に行こうが月が増えたり減ったりするわけないでしょ？」

ルイズの至極まっとうな意見に冷静になり、同時に違和感に気付く。

「そりゃそうだ。ごもつとも。」

（待て待て。話がすらすらつながるからにや考えすらしなかったが、ここが南蛮なら、嬢ちゃんたちやあ何で日の本の言葉あしやべってやがる？

それも魔法か？いや、俺にまわりついてんのは左手を中心にした、弱々しいしろもんだだけだ。

それに、これがない時でもふつうに言葉あ通じてやがった。それに、月のこたあ嬢ちゃんの言うとおりだ。確かに”西に行こうが東に行こうが変わる訳がねえ”）

本来、使い魔のルーンは強力な支配と魅了の効果をもつわけだが、起動条件下に無いことや、只でさえ、人を操る妖刀を従え人心惑わ

す、妖怪変化に魑魅魍魎を相手にしてきた鬼助とは些か、相性が悪かった。

「となると、考えられるのは、修羅道や地獄のようなこの世あらゆる場所か？ いや、どういつも生気がきちつとありやがる。

つーこたあ、俺の知ってる人間界じゃあ無いが、それでも人が存在する、言わば、七道目ってことかい？

いくら何でも無茶がすぎるぜ、仏サン。」

かつて、惚れた女の為に亡者蠢き、戦を続ける世界に飛び込んだ事を考えていると、思わず声にでる。そこに…

「シユラ？ ナナドー？ なにぶつぶつ言ってるのよ！？」

其れより、おなか好いたんだけど？」

「あつ、ああ。そうだったな、悪い悪い。じゃちよっくら行つてくらあ！」

（まつ、そうだな。ぐずぐず考えたって始まらねえ。仏サンの試練なんだ。何があつたって不思議じゃねえんだ！）

「ありがとよ！ 嬢ちゃん！」

「はあ！？」

突然の礼に素っ頓狂な声を上げる己が主人を尻目に、獲物（夜食）を求め闇に駆け出す鬼助であつた。

「と、勢い良く出たのは良いが・・・食いもんは何処にあるんだ？ とは言えそれ聞く為に帰るのも何とも間抜けじゃねえか？ つと、何だ？ 人か？」

ぶつぶつと独り言を重ねる鬼助は前方を歩く人影を見つける。

「占めた！あいつに聞きゃあ良い。おーい、その娘さんよ！ちょっと良いかい？」

「ひやいつ！?!?!？」

その娘、学園に勤めるメイドの訳だが。突然、聞こえた声に叫びをあげる。

無理もない。只でさえ、忍びである。気配も薄けりゃ、足音もない。暗い青紫の装束に、黒目黒髪の見目から闇にとけ込んでいる。まるで、闇夜が話しかけてきたようで、彼女はただ絶句し立ち尽くすしかなかった。

「ああ、済まねえ。脅かすつもりや無かったんだが、職業柄こうなっちまった。赦してくれや。」

自分の所行と彼女の反応に苦笑しつつ、謝りながらゆっくりと近づく鬼助に落ち着きを取り戻しよく見るメイド。（お、お化け？ううん、人、よね？こんな時間に何だろう？それに、こんな人見たこと…あつ、もしかして、）

「あのー、もしや貴族様が召還したという、平民の使い魔の方ですか？」

正解をはじき出すメイド。なかなかの肝っ玉で有る。

「応、確かばりえーるだとか。そう言うおまえさんは給仕かなにかい？」

「ああ、ミス・ヴァリエールですね。はい、私はこの学園でメイドとして働いている者です。」

「めいど…冥土？物騒な…って違うわな。大方、下働きのことを指すんだろ。」

「？　それで？どうなさったのですか？」

怪訝な顔で、用件を聞くメイド。変なんトコには突っ込まない。コレ、基本である。

「ああ、そうだった。いやなに、我が主君が夕餉を食べ損なったため、夜食を欲してな。それで食いもん探しにでたんだが、何処にながあるとも、誰にどう頼むべきかも解らねえでな。まあ、いざとなりゃあ獣でもって狩っちまうつてのも考えたんだが、如何せんこっちにきたのは初めてだし、何より時間がかかる。そんな所であんたを見つけたってわけだ。」

「ああ、そう言うことですか。なら、こちらへどうぞ。」

そう言うて近くの扉に案内し、そのまま中に入る。

「貴族様のお口に合うとは思いませんが、賄いよつのパンとスープです。一応、ワインも付けますね？」

「わいんつーと、ああ葡萄で作った酒のことか。いや、十分十分無茶言ってんのはこっちのほう何だ。これ以上贅沢言つと罰が当たっちまうぜ。」

「クスクス。そうですか？お役に立てたなら良かったです。」

「応、有り難え。じゃあな。っと」

帰ろうとし、何かを思い出したように振り返る鬼助。

「どうかなさったのですか？」

「いやなに、俺の名は鬼助ってんだ。娘さん、あんた名は？」「キスケさん、ですか？私の名前はシエスタと言います。」

尋ねる鬼助に、答えるシエスタ。

「しえすた、か。俺あ何せこのこたあ良くわからねえで。だからまた何か頼むかもしれねえ。そんな時、名前知ってなきゃ頼めるモンも、頼めねえからな。」

「ああ、なるほど。」

鬼助の答えに苦笑で答える。

「代わりといっちゃ何だが、俺にできそうながあつたなら言ってくれ。恩は返すぜ?」「ええ、ではその時は宜しくお願いします。」

「応よ。じゃあな!」

そう言つて獲物を持つて闇夜に鬼助であつた。

「不思議な人。さっきまでしっかり話をしていたのに。何だか幻を見ていたみたい。」

その眩きもまた、闇夜に消えゆくのだった。

「いよつと。おい嬢ちゃん。待たせたな。持ってきたぜ。」

そう言つて欄干に足をかけ窓から部屋に入る鬼助。果たしてそこに待っていたのは…

「おいおい、何だ?寝ちまったのか。」

ベットに転がった、桃色の主人であつた。

「風邪引くぜ。嬢ちゃん？」

そう言つて毛布を掛け、自分は壁際に座る。

「ふむ、捨てるのはもったいねえしな。」

そう言つて徐に、パンとスーブ、それにワインを開けていき、二人分の量を見る間に平らげる。

「うめえ、うめえ。世界が変わろつがうめえもんはうめえ。有り難えこつた。」

そう言つて鬼助は、明るい夜空を見上げるのであつた。

第一章 伍話

朝、清々しい春の涼気をふくんだ風が朝の目覚めのよびしろとなった。清々しい朝、しかし、公爵令嬢ルイズ・フランソワーズ・ドラ・ヴァリエールには、どうしようもない眠気と同じくらいの空腹が襲ってきた。

「くう、ふわあゝ」

（眠い、けど。お腹、すいた。夕べどうしたんだっけ？）

「応、嬢ちゃん起きたかい？」

突然、聞こえた声にぎよっとしつっ目を遣ると、部屋の隅に何かがあった。

「誰っ！？」

（な、ななななな何、空き巣？強盗？泥棒？）

女性の部屋に男女二人という状況下だが、発想に色がないのはご愛嬌。きつと、危機管理が高いのです。そうなのです。そうしなさい
byルイズ

「おいおい、そりや些か無責任ってなもんだぜ？嬢ちゃん。」

苦笑混じりのその顔に昨日の状況を段々と思い出していく。

「ああ、そうだ。使い魔召還で、私平民を……夢じゃなかったんだ。ハアッ」

軽い絶望感が寝起きの体にのしかかる。

「こっ、これ見よがしにため息つきやがって。」

「ウルサイわね！大体、ご飯もってくるっていったじゃない。何で持ってきて無いのよ。」

「なっ、おまつ、寝てたじゃねーか。第一ちゃんと持ってきたんだぞ！？」

理不尽な主人の癪癪に息をのむ鬼助。しかし、その言い訳が良くなかった。

「へえ。持ってきた、ね？じゃあそのご飯はどこかしら？」

「いやっ、それはな、あ、なんだ、勿体ないだろ？冷えたり、痛んだりしたら。だから・・・な？」

「な？... じゃないわよ！！つまりあんたは空腹のご主人様ほっぽって、自分だけ食べたってこと？うっそ、ヤダッ、こいつ信じられない！？」

己の使い魔の所行に、怒りのあまり、叫びまくる我らがルイズ姫。ここに判決は決まる。即ち、

「あんた、三日間ご飯抜き！！」

そんなこんなで朝の挨拶をすませ、そろそろ着替える時間帯である。

「ちょっと、犬！着替えるわ」

「いや、犬で。ちっ、まあいい。」

そう言っ外に出ようとする鬼助。

「待ちなさい。あんた、何してるのよ。」

「いや、何って部屋を出とこうとしたんだが。」

なに言っただこいつ？と言うような顔でお互いが、お互いを見る。
「良いから、着付けしなさい！全く。」

「はあ？おい、正気か？曲がりなりにもおれあ、いい年の男だぜ？
！」

「はんっ！男って所詮平民でしょ？いいから黙って言う通りに為さ
い！」

「何だ、こりゃ？」

鬼助とて、一時は宮仕えをしていたことがある。高貴な女性が着替
えるときに、幾人かの女中が付くものだ。

とは言え、あくまで女中、女であり下手に男が見ようものなら切り
捨てられても可笑しく無いのだ。

平民だからと言って完全に無視できるはずがない。歪。

鬼助の頭にその一文字が浮かんだが、口には出さず、別の言葉を持
ってその場を逃れる。

「いや、嬢ちゃんが良いつつても、俺がダメだ。こちらら惚れた
女に操たててる。やすやすと別の女の肌を見る訳にやいかねえ。」

相違ってルイズの言葉を待たずに部屋を出て、扉を閉めた。

「な、何よ。ご主人様ほっぽって、惚れた女だなんて。」

数分後、鬼助は女物の下着を抱え水場を探し回っていた。

「はあゝ。いくらあの場を逃げるためとはいえ、あんな事言っちゃ
う何て。すまねえ、虎姫。」

つてなことをぶつぶつと呟きながら、女物の下着を抱えて歩き回る男に好んで近づく好き者は居なかった。一人をのぞいては。

「あ、あのゝ。キスケさん、ですよ？どうしたんですか？」

引きつった顔に成りながらも尋ねる少女は昨晚あつたシエスタであつた。

「うん？おお、しえすたじゃねえか。どうしたって…いやなに嬢ちゃんに洗濯任されてな。」

（にしたつてあの嬢ちゃん、着付けはもういいから、洗濯くらいしろ… ったつて、こんなもん渡してんじゃねーよ。）

少し前のやり取りを思い浮かべて、内心愚痴を漏らす鬼助に、シエスタは合点がいった、という顔で話しかけてきた。

「ああ、水場をお探したつたのですね？良かったら洗濯、しておきますよ？乾いたらお持ちいたしますから。」

「そうかい？いや、助かる。洗濯ぐらいは出来るが、如何せん女物の服なんてなあ扱ったことねえし、そんな薄っぺらいモンなら尚更だつたんだ。いや、ほんと有り難え。」「いいえ。これが仕事ですから。そんなに言われると困ります。」

「そうか？…ああ、頼みごとついでに一つ良いかい？じつは、な…」

そう言つて鬼助はシエスタに今朝の顛末を語り、意見を求めた。

「そう、ですね。ちよつと極端な話かも知れませんが、大体貴族の方は大なり小なりそんな感じに思つてゐるんじゃないでしょうか？」

「おいおい。あつさり言われると返す言葉が無えよ。何とか思わねえのかい？」

「そりゃあ思わないかつて聞かれたら、ないといつたら嘘に成つち

やいますけど、曰わく六千年からの習わしですから。」

帰ってきた答えに鬼助は呆然となった。

（なんだそりゃあ？六千年だと？神代の時にも匹敵するじゃねえか。）

「やっぱり、魔法ってやつか？」

「そう、ですね。魔法には何をしても適いませんから。」

（根っこから染み込んでやがらあ。）

「いや、悪いな？変なこと聞いちまって。」

そう言うてから、幾つか言葉を交わし別れた。

「遅い！時間が掛かりすぎよ！」

帰ってきた鬼助に降りかかる第一声はこんな感じである。

「悪い悪い、知り合いと話し込んでしまったな。」

「知り合い？あんた、こっちに来たばかりでしょ。知り合いってどういうことよ？」

訝しむルイズに昨晚の顛末を語ると納得しすぐ興味を失ったようだった。

「ま、言いや。それより食堂に行くわよ？もうおなかぺこぺこ」

そう言うて廊下に出るとルイズは固まった。

「どうした？嬢ちゃ」おはよう、ルイズ。あなた、ほんとに平民を

喚んだのね。流石にゼロは違うわ。」「…あん？」

其処には、炎のような色の髪スタイルのいい女性が立っていた。

第一章伍話（後書き）

ぼちぼちと書いている訳ですが、展開が遅い。とは言え、まあゆっくりと進めていく訳ですので。今後も愛読宜しくお願いします。

第一章 陸話

「ゲツ、ツエルプストー？。あんた何で… たく朝から最悪。」

主人の暴言に呆気にとられる鬼助をよそに、彼女たちの話は進む。

「あら、随分な挨拶ね？ クラスメートに対して」

「あんたも人の事言えないじゃない？」

「えー？ 私は本当の事を言っただけじゃない。それで反応するってことは自分でも自覚してるんでしょ？」

「ぐっ…」

そう言っただけで話がつぎれると赤毛の女性の視線が鬼助を捉えた。

「あなたが、ルイズが喚んだ使い魔？ お名前は？」

「ん？ 鬼助ってモンだ。あんたは？」

その平民らしからぬ物言いにキョトンとしながら、彼女は答えた。

「私？ 私はキュルケよ？ キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォ
ン・アンハルツ・ツエルプストー。」

「長えよ！ どれが姓で、何が名だ？」

「キュルケで言いわ。でも… ほんとに平民ね？ この国？ 見ない服
装だけ。」

鬼助の服や、貴族に対する接し方などに違和感を覚え尋ねるキュルケ。

「あん？ まあ… こっちじゃ東方っていわれてらあな。」

（実際はどうも違う様だが。とは言えややこしく成っちまいそうだからな。）

「成る程ね。東方かあ？道理で見ない格好してるわ。でも、その接し方は頂けないわ？私は気にしないけど、結構ウルサいの、居るから。」

言われ、納得する鬼助。

「そうだな。こりや生まれつきのモンだが、無駄な波風起こす気は無えや。注告感謝するぜ？…っと、注告ついでに一つ良いかい？」

「？ええ、別に良いけど？」

「済まねえ。やっぱり俺みたいない使い魔ってのは居ないのか？」

「そりゃあね。ちよつと待って。フレイム？来なさいな。」

そう言つと、キュルケの後方から赤い巨大なトカゲがやって来た。

時折口からチロチロでているのは舌ではなく、炎のようだ。

「使い魔っていうと、こんな感じの魔獣が基本的よ？」

そう言つて火トカゲを撫でるキュルケに、今まで悔しそうに黙っていたルイズが、今度は若干羨ましそうな口調で尋ねた。

「それってサラマンダー…よね？」

その言葉にキュルケは嬉々と答えた。

「ええ。フレイムって言うのよ。火竜山脈のサラマンダー！この見事な体躯、好事家に見せたら幾らでも積むわよ？」

実際、フレイムは大きい。ルイズが知っているサラマンダーのふた周りほどは有ろうか。

「私の通り名、”微熱”にピッタリでしょ？…っていうか話し込んでしまったわね。そろそろ食堂に行かなきゃ遅れるわ？じゃあね、ルイズ、キスケ。」

そう言つて、フレイムを従え去つて行つた。その後ろ姿を何ともいえない顔ので見やるルイズに声を掛ける鬼助。

「どうした、嬢ちゃん？ふれいむが、羨ましいのか？」

「羨ましいとかじゃなくて、悔しいのよ！ツエルプストーは立派なサラマンダーで私は平民？なんでっ・・・！」

「おいおい…」

（つまり、こいつらの使い魔つてのは、侍の腰の差し物みたいなもんかい。）

「大体、あんた何ツエルプストーと馴れ馴れしくしてんのよ？あいつ等はね…」

この後数分に渡り、先祖の寝取り寝取られ話を聞かされることとなる。

合掌。

そんなこんなで、朝食の時間。

「つたく。あんたのせいで、無駄な時間喰っちゃったじゃない！」

「うおい！俺か？俺のせいだったのか？！」

「ウルツサイ、全く。」

着いたわよ？ここがアルヴィースの大食堂よ！本当ならあんたみたいな平民には、縁のない場所なんだから。」

そう言って先に進む。

「ハハッ。確かにこいつあすげえ。」

そう言う鬼助の前に広がっていたのは、錚々たる光景だった。小人とも人形ともとれるものが、壁面に存在し、床は大理石が敷き詰められている。

豪奢なテーブルの上には所狭しと料理が並び湯気を立てている。

と、感心しているといすの前でこっちを見ながら突っ立っているルイズがいた。

「どうした？嬢ちゃん。食わねえのかい？」

「違うでしょ！さつさと椅子を引きなさい！エスコートもできないの?!」

「いや、えすこーとって…」

「もういいわ。あんた今朝言ったとおり、ご飯抜きだからね。」

そう言っつと食事を始めた。

「やれやれ…」

（しかし、朝っぱらからどんだけあるんだ？この飯の数は…）

そう心中で愚痴りつつ、ふとシエスタが給仕をしているのに気づく。

「嬢ちゃん、暇なんでちよっくら話し込んでくらあ。」

そう言っつてシエスタ厨房に引っ込んだのを確認して歩き出した。

「ちよ、ちよっと、待ちなさい。キスケ？キスケ！」

(しえすたは、と)

厨房に入る鬼助。其処に大きな声が飛ぶ。

「おい！その奴！」

「ん？俺か？」

「そう！お前だよ！いったい何のようだ？きよろきよろしやがつて仕事の邪魔だぜ？」

「ああ、いや、悪「キスケさん？どうしたんですか？」…しえすた。」

どうやら、怒声が気になり見に来たようだった。

「なんでえ、シエスタ。お前の知り合いか？」

「はい。ほら、朝に話した…。キスケさん、こちら料理長のマルトーさんです。マルトーさん、こちらキスケさんです。」

「おう、おめえさんが貴族の使い魔にされたって奴か。若えのに大変だなあ？今日はどうしたい？」

「いや、食事抜きをくらっちゃってな…」

そう答えるとマルトーは豪快に笑う。

「ハッハッハッ！早速なんかやらかしちまったのか？まあいい、食事のこたあ心配すんな。賄いでよけりや幾らでもやるからよ。オイ、シエスタ。盛ってきてやれ！」

「ハイ。」

そう言ってパンとスープを持ってきてくれる。

「いいのか？」

「何、いいってことよ！困った時あ、平民同士な……。所で、どうだい？旨いだろう？」

「ああ、旨え。これならいくらでもはいる。」

そう言って食べる鬼助の心中は、マルトーの江戸っ子気質に少しグツときていたのだった。

第一章 漆話

厨房での食事を終え、食堂に戻ってきた鬼助を待っていたものは般若もかくや、と言わんばかりの表情をした己の主人だった。

「あんた、ご主人様、ほっぽって、いい、度胸じゃ無いのよ!」

一言一言刻みつけるように言いつけるルイズに、もはや、言い返す気概を失った鬼助にできることは、最早案山子のように突っ立ってただ頷く事だった。

「あゝもう! あんた、私を苛つかせる事しか出来ないわけ?」

「あゝ、いや、済まねえ。」

「はあゝ。もういい。あんたにや期待しない。」

そう言っただけを返し歩いて行く。

「っておいっ! どこ行くんだ?」

「…あんたねえ。此処は学園! だったら授業があるに決まってるじゃない。もう、黙ってついてきなさい!」

「はっ、はい。」

(っ! かよくよく考えりゃ、ガクエンって何なんだ? 今の機嫌じゃ聴いても藪蛇か。)

そうして思うことを口にせず、ルイズの後を付いていった先にあつたのはそれなりに広い部屋であつた。

其処には既にルイズと同じ様な格好をした者達が座っていた。

しかし、鬼助が気になったのは彼等ではなくその側にいる存在。妖怪とも魑魅魍魎とも取れないものたちだった。

「成る程ね、こいつら全部”使い魔”ってやつかい。空飛ぶ目玉に大蛇、鳥や猫、まるで百鬼夜行だぜ」

そう言つて感心する鬼助にルイズの声が飛ぶ。

「訳わかんない事言つてないで、とつとと来る！そんで静にしないでなさい！」

そう言つて指差した場所は床。とは言え、何言つのは數蛇と、大人しく座り込む。

そうして数分するとご婦人の入室である。
すると雑談がやみ部屋が静かになる。

「皆さん、お早う御座います。無事に召還の儀式を終えたようで何よりです。あら、ミス・ヴァリエール？変わった使い魔を召還したようですね？」

「先生！ゼロのルイズが平民を連れ込んでます。」

その声を皮きりに一斉に笑い声と皮肉が飛ぶ。

「おいおい。幾ら呼べなかったからつて平民を連れてくるなよな！」
「さすがゼロね！やることが違うわ。」

そういつた声に我慢できなかったルイズは抗議の声を発する。

「ミス・シュベルース！風邪っぴきのマリコルヌが侮辱しました！」

「風邪っぴきじゃない！風上だ！」

収集がつかなくなった状況に講師としての激が飛ぶ。

「皆さん、お友達を侮辱してはいけません!!」

その声にくらか静になるが、騒ぎ始めた元凶は止まらない。

「ルイズが言った風邪っぴきは侮辱ですが、僕のいったことは事実です!」

その言葉に再び笑い声がちらつくが、シュベールスが杖が振られるとそれも収まった。

「お友達を侮辱する口は要りません。そのまま授業を受けなさい!」

どうやら口を塞いだらしい。

「はあ。魔法ってのは便利なモンだなあ。」

様子をうかがっていた鬼助はそう漏らすと気になることを主人に聞くことにした。

「なあ嬢ちゃん、気になってたんだが風邪っぴきだの微熱だのってのは何だ?」

「…通り名よ。得意とする属性と本人の気質とかからつけられるの。ミスタ・コルベールは炎蛇、ミス・シュベールスなら赤土とかね。」

「なるほどねえ。じゃあ嬢ちゃんのゼ…ス・ヴァリエール?ミス・ヴァリエール!」

話し込んでいた為か、どうやら先ほどから呼ばれていたらしい。

「ミス・ヴァリエール。使い魔と仲がいいのは良い事です。ですが今は授業中、講義をきちつと聴くように。ミス・ヴァリエール前に

出て鍊金を。石を何に変えても構いません。」

罰のつもりか、どうやら魔法の実践をさせたいらしい。すると、大人しくなっていた生徒たちが再び騒ぎ出す。

「先生！正気ですか？！ゼロ何ですよ？」

「止めて？ね？辞退して、ルイズ。」

「ゼロへの罰じゃ無い。これじゃ僕らへの罰になるじゃないか。」

正に、言いたいほうだいのクラスメート達に苛ついたのか勢い良く立ち上がり颯爽と教壇へと歩く。するとシュベールはルイズに励ましの言葉をかける。

「ミス・ヴァリエールの噂は知っています。しかし、授業の成績は優秀。それに使い魔を得たのですよ？しっかりと集中し、鍊金する対象を見据えなさい。呪文と同時に変わる物質のイメージを強固にさあ！」

そう言つて促すシュベールはルイズは頷き、集中し始める。ふと、鬼助が周囲を見ると何故か机や椅子を盾とする生徒たち。

「おいおい。お前ら何してんだよ？」

「お前つて、平民の分際で！…まあいい、怪我したくなかつたら隠れてろ。お前の主人がどれだけ傍迷惑な落ちこぼれかわかるから。」

その言葉に首を傾げる鬼助。

一方、ルイズは集中が終わつたらしい。短い詠唱の後

「鍊金！！！」

のかけ声と同時に杖を振る。

瞬間、極光煌めき轟音がその場を支配する。

ガゴォウン！！！！！！

ギヤー、ガォーン、ギーギー！！

爆音の後には、人の悲鳴か獣の声か。使い魔はあまりの轟音と衝撃に制御を離れ、生徒達は或いは使い魔を鎮め、或いは逃げ惑う。まさに阿鼻叫喚。

その状況にルイズは一言。

「ちよつと失敗したみたい。」

「「「何処がちよつとだ！！！！」」」

「つよつと！また派手に散らかしたなあオイ。」

現在は授業後。

シュベルースは、阿鼻叫喚の際至近距離で爆発を受け気絶しているが、特に怪我はなく起きると直ぐに状況を沈静化、教師としての仕事を果たし、ルイズには罰として教室の掃除をさせた。無論、ルイズの使い魔である鬼助も例外ではない。

「おい、さぼってないでとつと片付けろよ。急がねえと昼、食い逃しちまうぜ？」

鬼助がそう言うのとルイズは鬼助を睨みつけ、言葉をぶつける。

「ふんっ！どうせあんたも、内心バカにしてんでしょ！そう、ぜ

口のルイズは才能ゼロ、成功の可能性ゼロってわけ！…何よ、何か言いなさいよ！！」

「いや、ゼロって言葉の意味が分からねえんでな？」

「……………」

「おい？どうした、嬢ちゃん？」

「はあ。何か馬鹿みたい。自虐するみたいに喋って、使い魔に当たって。こんなの貴族のする事じゃ無いわ。」

そう言つと、箒を置いて歩き出す。

「って、オイ！掃除は！どこ行くだよ？！」

「ご飯食ベにいくから。あんたは掃除。食ベ終わる頃には終わるでしょ？」

「はあ？嬢ちゃんの仕事だろうが！何言つてんだ！」

「あんたこそ何言つてんのよ？主人の失敗は使い魔の失敗。あんたがやるに決まってるでしょ？役に立たないんだからこれ位しなさい。」

「

「なんだそりゃあ？！」

余りの言葉に絶句する鬼助を尻目に、ルイズは悠々と食堂に向かうのであった。

「ふう。美味しかった。後はデザート！やっぱりクックベリーパイよね。」

掃除をサボって数刻後、ルイズは幸せそうにデザートを選んでいた。最早、掃除をさせている鬼助のことは完璧に頭がない。そんな感じでデザートを堪能していると、どうも耳障りな騒ぎが聴こえて来る。「も、申し訳ありません！どうかお許しを！」

「いや、許すわけにはいかない。君のせいで二人の女性が傷ついたのでからね。」

どうやらメイドが粗相をしたらしい。気になったので隣接の相手に聴く事にした。

「ねえ、どうしたの？」

「何だか、ギーシュが二股かけてたらしいわ？それがばれたきつかけをメイドが持ってたみたい。」

「はあ？なにそれ。馬鹿みたい。だいたいギーシュなんかのどこがいいんだか。」

馬鹿馬鹿しい理由の騒動が嫌になり、ギーシュに文句を言ってると思った瞬間、それは起こった。

「全く、コレだから平民は！君みたいな奴の代わりは幾らでも居るんだ責任はとって貰うおわあ！？」

数メール転がるギーシュ。

「おい、何小せえことしてやがる。」

其処には、あろう事が貴族を足蹴にした、己の使い魔の姿があった。

「あつ、あんた…なにやってんのよー！？」

第一章 撥話

昼時、シエスタは仕事に追われていた。

（ふう。此処に働きにきていくらかたったけど、ご飯時はやっぱり忙しいな。）

そんな事を考えつつも、顔には笑顔を絶やさない。

ふと、シエスタの目に桃色の髪が写った。あれほど鮮やかな桃色は滅多にない。

（あれは…ミス・ヴァリエール？でも、何で一人なのかしら。まさか、キスケさんまた何か粗相したのかしら）

そんな事を考えつつ給仕をしていたのが運のツキだったか、貴族にぶつかってしまった。

「キヤツ！あ、ああ、申し訳ございません。お怪我は無かったですでしょうか？」

「ああ、全く気をつけ給えよ。メイド君。」

そう言つて話の輪に戻る貴族にほつとする。

（良かった。酷いこと言われなかった。って、あれ？）
「これは…？」

シエスタの足元に落ちていたもの、それは紫色の液体が入っていたガラス瓶であつた。

（これは…、きつとさつきぶつかったときのだわ。あの貴族様、どちらに…）

そう思い、探すとすぐに見つかった。先ほどとさして変わらぬ位置でクラスメート達と談笑していた。

「それで？ギーシュ、お前結局誰と付き合っているんだい？」

「付き合う？馬鹿なことってはいけない。僕は全ての女性に平等だよ？特定の相手は居ないのさ。」

「おいおい、嘘を付くなよ？この前、お前が一年の子と遠乗りに出たのをみてた奴が居るんだ！」

どうやらあの貴族、それなりにモテるらしい。そういう男は身嗜みに気を使う。そんな彼が持ち歩いてるという事は、もしかしたら大事な代物かもしれない。そう考えたシエスタは、意を決して声を掛けた。

もし、これがギーシュがひとりだったのなら、或いはせめて、人通りの少ない場所だったのなら話は違っていたかもしれない。しかし、生憎と杖は振られた後だった。どちらにとつての不幸かは別だが。

「あの、此方の物、御落としになりましたよ？」

「え、あ、いや、そんなものには覚えがない。間違いではないかな？」

「え？でも…」

確かにこの貴族が落としたはずなのだ。彼が通る前には落ちていなかったのだから。

そうこうしているうちに、彼と話していた別の貴族がガラス瓶を取る。

「おや？これは、香水のようだ。それにこの匂い、確か…」

「ああ！この香りはモンモランシーだ。間違いない。」

「ミス・モンモランシーは香水を調合するが、気に入った相手にしか贈らない！という事は……」

「ギーシュ！君が今付き合っているのはモンモランシーだな？！」

「なっ、何を言っんだい？彼女の名譽に賭けて言っが……」

どうも不味いことに成った。自分の持ってきたものが話題になり、ギーシュという貴族がしどろもどろになっている。

しかし、逃げるわけにはいかないと、その場に待機しているシエスタの後ろから一年と思しき貴族の少女がやって来た。

「ギーシュ様、その話本当何ですか？」

既に涙目である。いよいよマズイ。

「ケ、ケティ？！いや、これは……」

「非道いです！ギーシュ様の馬鹿！」

罵倒と同時、ギーシュの左頬に赤い紅葉が。

駆けだしていくケティの後を追おうとするギーシュに、反対方向から鋭い声がする。

「ギーシュ……！」

「なっ、モンモランシー？！」

どうやら件の女性らしい。金髪の縦ロールが吹き込んできた風に靡く。

「モ、モンモランシー！これはだね……」

「ギーシュ、”そんな物”で悪かったわね？安心して、もう贈らな

いから。」

その言葉が終わると同時、今度は右頬に紅葉。そして、颯爽と去っていくミス・モンモランシ。

不味い。これは、非常に不味い。しかし、もう逃げられない。

「は、はは、はははは。どうやら彼女達はバラの本質を理解できなかったらしい。」

何を言っているのだろうか？この男は。

周りも同じようなことを考えたのか、視線が冷たい。

その視線が堪えたのか、此方を向いたバラ貴族の顔は羞恥と怒りで真っ赤になっていた。

「なんていう事をしてくれたんだ！？君は機転という言葉をしらないのかい？！」「も、申し訳ありません！どうかお許しを！」

必死に謝るが、もう駄目かもしれない。そう思い、涙が溢れてきた目にとんでもない光景が飛び込んできた。

ギーシュの背後にいつの間に其処にいたのか、鬼助が立っていた。そしてあろう事が貴族を蹴り飛ばしてしまった。

「おい、何小せえことしてやがる！」

信じられない。

「あんだ…、なにしてんのよー！！」

叫ぶ桃色の髪の貴族、ミス・ヴァリエール。彼の主人。当然だ、平

民が貴族を足蹴にするなど有り得ない。許されるものではない。

「ああ、嬢ちゃん。少し黙ってる。」

酷く呆れた顔と声で答える鬼助

「き、君は何をしたのか分かっているのかね?!」

「ああ。物事の分からねえ狗を躰ただけだぜ?」

「ちよつとあんた…! 貴族に向かって何てこと…!」

「イヌ? 狗だと? 貴様つ平民の分際でつ!!」

激怒するバラ貴族。あれだけいわれたら、貴族でなくとも怒る。そして…

「決闘だ!!」

私刑宣告が下った。

第一章 仇話（前書き）

初めての戦闘描写入ります。見苦しい点などあるでしょうが、ご勘弁を。

第一章 仇話

「決闘？はんつ、面白え。此処で遣るのかい？」

「馬鹿を言いたまえ。この食堂を平民の血なんかで汚せるわけが無いだろう？ヴェストリ広場に來たまえ。命が惜しくないのならね？」

そう言つて去つていくギーシュ。

すると、シエスタが泣きそうな顔をして近寄つてきた。

「大変。キスケさん！あなた殺されちゃう。」

「そうよ！あんた、今からでもいいから謝つてきなさい。」

前後から危険を述べられた鬼助だが、其れでも謝る気は毛頭なかった。

「謝れつていわれてもな。別に良いさ。謝つても。確かに足出したのは、俺だからな？」

「じゃあ……」

「だが、それも、あの餓鬼がしえすたに謝つたら、だ。ま、無理だろうがな。」

「バカ言つてんじゃないわ？何で平民に……」

その言葉に溜め息混じりで答える。

「全く。いい加減俺も怒るぜ？嬢ちゃん。今回の件、しえすたの同僚から聞いたが、どう考えてもしえすたに非は無えよ。それとも何かい？嬢ちゃんも気が利かないのが悪いと？」

「えっ、それは……確かにギーシュは見苦しかったけど……」

「女の二人や三人つてのはある程度身分がありゃあ珍しいもんじゃ

ねえ、後は男の甲斐性の問題だ。其れが自分の不手際で振られた女の事で、自分より目下の、しかも女に当たるなんざみつともないったらありやし無え。」

「其れでも貴族を足蹴にするなんて…」

なおも心配するシエスタに苦笑しつつ聞く

「まあ、心配いらねえよ。それで？べすとり広場ってのは何処なんだい？」そうして、一行は広場へと向かうのであった。

ギーシュが頼に紅葉を乗せた頃、学園が誇る図書館たるフェニアのライブラリにて唸る教師が。
コルベールである。

（人の使い魔。そしてそのルーン。珍しい。実に珍しいが、始めて見るものではない。実物ではなく、書物だった筈だ。）

そういつて本を開いていく中で、遂に見つけた一冊。しかし、その本の題名が問題であった。

その本を片手に学園長室へ走り抜ける。

果たして学園長は、妙齡の秘書とどつき漫才をしていた。

「オールド・オスマン！大変です！」

「むお、どうしたのじゃ？ミスタ…えーとコッパゲール？」

「大変なことがわかりましたぞ。これは、学園いや、王国レベルの一大事ですぞ?!」

「世の中、大事なことはあふれておる。総じて一大事などあるものではない。落ち着きたまえ。後、訂正しないのな？」

「これを見てもそう言えるのですか？…やっぱりワザだったんで

すね？」

そう言って持ってきた本を見せるコルベール。

「こりゃ！禁帯出の本ではないか。教師が禁を破るでない。しかも、始祖と使い魔のルーン」とは、何とも古くさい物を…こんな事しとるから、頭が寂しくなるんじゃ。」

「ええいつ！だまらっしやい！これを見て下さい。後いい加減髪から離れる。」

そう言って目当てのページを開き、ポケットに入れていたルーンの写しを見せる。

瞬間、オスマンのまとう雰囲気が一気に引き締まる。

（っ、流石は偉大なるオスマン。老いて尚、此ほどの…）」

「ミス・ロングビル、退出を。」

「はい。」

ロングビルを退出させ話を促す。

「それで？この写しはどこで？…いや、昨日は儀式があつたのじゃつたな。となると、生徒の使い魔に？」

「はい。ミス・ヴァリエールの呼び出した平民の使い魔、彼の左腕に。」

「平民？しかも、ミス・ヴァリエールと言えば…」

「ええ、ミス・ヴァリエールの魔法は成功例がありません。今回の儀式が初の成功です。平民の方ですが、基本的に理性的でした。しかし…」

「どうしたね？何か問題でもって？」

「先ずは体つき。筋骨隆々とは言いません。しかし、しなやかでバネがある。何より血の匂い。濃いのです、信じられないくらい。」

始めて彼を認識した瞬間を思い出し、身を固くする。

「君が、それほどに…」

するとノックと同時にロングビルの声。

「失礼します。宜しいでしょうか？」

「うむ、どうしたね？」

「生徒が決闘をする…」

「決闘？」

「はい。それに対して、教師陣が”眠りの鐘”の使用許可を求めています。」

「アホらしい。たかが子供の喧嘩に秘宝はいらん。誰だね？喧嘩の本人達は？」

「独りは、二年生のギーシュ・ド・グラモン。」

「グラモンか。父親は浮き名を流して追ったからの。大方、女絡みか？」

「はい。もう一方は、ミス・ヴァリエールの使い魔ということです。」

「っ！オールド・オスマン！」

コルベールの言に頷きながらロングビルへ指示を出し退出させる。

「いかなさるおつもりですか？或いは”眠りの鐘”の使用も視野に入れるべきでは？」

「いや、グラモンの子息には悪いがかませ犬になってもらう。」

「なっ！？」

「聴けい、無論死なすつもりなぞない。直ぐに出れる心構えをして

「おけい。」

そう言つて遠見の術を使い監視を始めた。

「やあ、逃げずに来たことはほめてあげよう。それで？謝る気はあるかな？」

「おいおい、何で犬に謝らなきゃならねえ」

「っ！いいだろう。僕は貴族だからね。魔法を使わせてもらつよ。」

するとルイズがギーシュに訴える。

「待つて、決闘は禁止になつてる筈よ？こんな事止めて。」

「禁止しているのは貴族同士の決闘さ。相手は平民、問題ないのさ。ではいくよ？使い魔君。それっ！」

バラ型の杖を振るうと、花卉が落ちた場所に忽ち精巧な青銅人形が出来る。

「之が僕のワルキューレさ。覚悟は良いかい？」

「おい待て、まさかそれで戦るつもりか？」

「そうさ！今更、怖じ氣ついたのかい？」

その言葉に最早言葉のない鬼助。

「…根腐れしてやがる。」

「まだそんな減らず口を言つのかい？もういい。お喋りは終わりだ！」

周りの貴族達は声を荒げてギーシュを焚き付ける。

「ギーシュ！容赦するなよ？叩き潰せ！」

「そうだ！生意気な平民に思い知らせ！」

そういつた貴族達の中に冷めた目で見やる者が二人。

「あら。キスケとか言つてたっけ？ね、どう思うタバサ？」

「分からない。」

赤毛の少女、キュルケとその友人、青い髪の少女タバサである。

「分からない？珍しいわね？あなたが曖昧に答えるなんて。」

「平民ではメイジには勝てない。でも……」

「でも？」

「彼は何かおかしい。」

「ふん。面白そうじゃない。」

そういう間にも状況は進む。

「では、行けっ！ウルキューレ！」

その言葉と共に青銅人形が、弾ける様に動き出す。

凡そ、百キロテはするだろう青銅の塊は人が疾走するのと同等の速度で地面を滑る。

人形の拳が、無礼な平民の鼻を潰すとギーシュが確信した瞬間！

ギーシュの頭上に風が流れた。

その瞬間を正しく認識できたのは、僅かに三人。

一人は年に似合わぬ実戦経験から決闘を俯瞰していたため。もう二人は遠見の術で広場全体を見ていたため。その詳細はこうである。

風は青銅人形とぶつかる瞬間、一跳びで越え空中その場で加速。そのままギーシュの頭上を越えて今度は急落下。そして今、ギーシュの背後にてその背を…

蹴激

この間、僅かに二秒。

蹴り飛ばされたギーシュは二メートル程飛び、そのまま三メートル程転がる。

故意か、偶然か。二人の位置は先程と反転していた。

「なっ、一体何が？」

混乱するギーシュ。更に言葉での追い討ちが入る。

「遅えよ。人形遊びは部屋でしな？思わず蹴り飛ばしちまったじゃねえか。」

「何？一度ならず二度までも…?!貴様っ!!」

興奮するギーシュをよそに、取り巻いている貴様達は騒然となっている。

「なっ、何があつた？いきなり消えたぞ!」

「馬鹿な、先住か?!」

ざわめく貴族の中で、キュルケはワクワク、タバサは目を見張り、ルイズは息を呑む。

「たっ、たかが一回僕が本気じゃない状態で、攻撃したからって。

…ワルキューレエ！！！」

そう言うのと杖を一振り。すると青銅人形が計七体、しかも全てが槍や剣を所持しており、鬼助を取り囲んでいる。

「もう容赦しない。油断もしない。今、この場で土下座をするのなら、命だけは許そう。それが嫌なら…」

杖を更に一振り。

すると、鬼助の足元に青銅の直剣が突き刺さる。

「武器を執りたまえ。しかし、それを掴むのなら命の保証は…無い！」

「っ！ギーシュ！」

「止めるのかい？ルイズ。だが、無理だ！此処まで馬鹿にされては貴族の面子が立たない！さあ、選択したまえ！」

そう言うて杖を突きつける。

「選択ねえ？安心しろよ、端つからとる道は一つしかねえ。目の前に剣があるなら尚更な？…まあ、刀じゃねえってのはただけねえが、な。」

そう言うて鬼助は銅剣を引き抜く。

「執ったな？ならば容赦はしない。言っておくがグラモン家は軍人の家系でね。僕も多少、兵法をかじっている。ワルキューレには、剣と槍、槌に棍それぞれタイミングと攻撃位置を設定した。」

その言葉と同時にワルキューレが一斉に動き出し、鬼助を牽制しタイミングをずらす。

「君がいくら速かろうが抜ける穴が無ければ抜けまい！行けっワルキューレ！」

そうして円を描いていた、ワルキューレの輪が一斉に縮まる。

「御託はいい。穴がなけりやあ作ればいい。其れだけだ。」

鬼助はその言葉と共に、体を軸に回転、剣と腕の遠心力を持って刃の旋風を作り出す。風は勢いを増し、剣の届かぬ距離ですら風の刃が青銅人形の壁を青銅塊の瓦礫を作り出す。
即ち、

” 朧流 水面月ノ輪 ”

「馬鹿な……」

啞然とするギーシュに砕けた剣が突きつけられる。

「駄目だな。」

「な、何？」

「地金の練りが足りねえ、ただ硬いだけの三流だ。魔法なんかに頼るからそうなる。……さて、戯れは終わりだ。」

そう言つて剣を捨てて鬼助。

「構えな、餓鬼。決闘のやり方つてのを教えてやるぜ！」

言葉と同時に、ギーシュの顔に拳を叩きつけた。

「グッ、……何を？」

「ふんっ、自分の拳も握れねえか、よっ！」

更にもう一撃。

「こんなモンかよ、貴族様？」

「馬鹿に、するなっ！」

ギーシュが反撃を行う。よける気が無いのか、真っ正面から受ける鬼助。

「やればっ、できるじゃねえか！」

「黙れっ、平民！」

そのまま殴り合う両雄。取り巻いていた貴族達は或いはその展開に熱くなつて興奮し、或いは魔法を使わず拳を振るうギーシュに侮蔑の視線と言葉をとばす。

「なによ…あれ？」

「あら、ルイズ。熱いわ、あの二人。貴女には分からない？」

「キュルケ！貴女…」

「黙つてみてなさい。男の決闘なんだから。そのメイドもよ？貴女、当事者なんだから。」

「あ、はい！」

そんなルイズ達の会話をよそに殴り合いは続く。しかし、自力の差がギーシュが一発に対して、鬼助は二三発ぶち込む。ギーシュの顔は赤にまみれる。

そして、遂にギーシュが倒れた。

「っはあっ、はあっ、全く、容赦がつ、ないんだな、君は？」

「たりめえだ、男の殴り合いで容赦なんざ無粋のやるこつた！」

「フッ、なるほど、ね。ここまでされているのに不思議と何も感じない。いや、痛いがね？」

「はんつ、頭あ、冷えたかい？」

「ああ、守るべき女性に貴賤はない。僕としたことが、曇っていた様だ。三流と言われても甘んじて受けよう。」

「ほお、言っねえ。それに殴られて男前になったんじゃねえか？ほらっ」

「なに？」

鬼助の言葉と同時に、女生徒が二人飛び込んでくる。

「モンモランシー？！それにケティまで！！」

「ウルサイ、馬鹿じゃないのギーシュ！こんなになるまで…」

「ギーシュ様？！お怪我は？痛い場所はどこですか？！」

二人とも水メイジらしく、手際良く治療していく。その様子に呆氣にとられながらも、鬼助に苦笑を向けながら言葉を掛ける。

「全く、適わないな、君には。僕はギーシュ、ギーシュ・ド・グラモン。名前を聞いていいかい、強い使い魔君？」

「鬼助ってんだ。こつちこそ悪かったな、狗つったり蹴飛ばしたり？…おっと、嬢ちゃんが呼んでやがらあ。」

そう言っつて踵を返し手を振って一言、

「じゃあな、”ギーしゅ”」

そのまま殴り合う両雄。取り巻いていた貴族達は或いはその展開に熱くなつて興奮し、或いは魔法を使わず拳を振るうギーシュに侮蔑の視線と言葉をとばす。

「なによ…あれ？」

「あら、ルイズ。熱いわ、あの二人。貴女には分からない？」

「キユルケ！貴女…」

「黙ってみてなさい。男の決闘なんだから。そのメイドもよ？貴女、当事者なんだから。」

「あ、はい！」

第一章 仇話（後書き）

実際はそうでないのだろうが、自分的に今回は分量が多かった。以降、更新ペースが遅くなるかも知れません。申し訳ないです。

第一章拾話

学園長室。ここでは、先程の決闘を伺っていた二人が重い空気を持つて話を始める。

「勝ってしまいましたね。しかし…」

「ウム、大事無い様で一安心と言ったところか。じゃが、気付いておるかね、ミスタ？」

「ええ。剣を執る前も速かった。ですが剣を執った後は…あれは人の速さでは在りません。」

「ウム。更に言えば、速度の上昇による迷いが感じられ無んだ。恐らく想定のうち。詰まり、彼の力はルーンに関係はない。あつたとしても大きいものでは在るまい。」

オスマンの見識に目を見張るコルベール。

「驚いた！オールド・オスマンは剣の心得が？」

「いや、そんなものは無い。ただ、長く生きるとはこういう事じゃ。」

「

その言葉に、合点がいったと頷く。

「なる程、恐れ入ります。しかし、かの使い魔。ルーンの通り、ガンダールブなのでしょう。如何いたしますか？王国に報告を？」
「それには及ばん。考えてみよ、ガンダールブなどという始祖の遺物、王国の益暗共に渡そうものなら、連中喜々として戦争の言い訳を考え始めるぞ？」

そう言つて目を伏せるオスマン。

「のう、ミスタ？ 儂もこの学園の長をして久しい。その中でつくづく思う。子供達が今学ぶべきは魔法の数でも、下らぬ貴族の誇りなどではない。魔法の使いどころであり、真のメイジとしての在り方じゃ。はらばこそ、薄汚れた大人の犠牲にはしたく無いのじゃよ。」
そう言うオスマンに対して立礼で応えるコルベール。

「誠に、その通りに在りますな、偉大なるオスマン。」

「偉大等ではない。ただ死に損ない続けている、老いばれよ。…ミスタ、彼等に色々便宜を計ってやってくれい。」

「はっ！ お任せ下さい。」

一方、ヴェストリ広場は主役が二人とも去ったにも関わらず、騒然としていた。

「バカな、あれはエアカッター、いやカッタートルネードか？」

「詠唱していなかった！ もしや、先住か？！」

「平民ではなかったのか？ もしや、エルフ？！」

皆、思い思いの想像を口にし、混沌を広げていく。
その中で、全く見当違いの興奮を見せる者がいた。

「うふ、フフ、ふふふつ。ね、見た？ ああ好いわ。ヴァリエールなんか惜しいくらい。そう思わない？」

その通り名のように滔々とした表情で語りかけるキュルケに対して、
タバサは深い思考の海に潜っていた。

（あれは、魔法ではない。では先住？違う、風体は変わってるけど、間違い無く人間。となると、ただの剣術？有り得ない…）

深く考えるもどうにも答えが出て来ないようである。

臙流は、元来剣術ではあるのだが斬るべき対象を人のみならず、怪異幽玄天変地異を引き起こす輩をも斬らんとしたため、些か常道の剣術にはない、術方じみた代物も多々在るのである。

キウルケとタバサが互い、思考にはまっていた頃、主役であった鬼助はルイズとシエスタに挟まれていた。

「ちよつと、あれなに？！」

「凄いです！キスケさんってスツゴい剣士だったんですね？！」
黙ってないで答えなさい！」

「どうやったらあんなになれるんですか？！」

最早、鬼助は二人が何を言っているのか聞き取れない。

「ウルセエ！同時に喋られてもわからねえよ！」

「ムッ…少し黙ってなさい、メイド。」

「あつ、いえ、私仕事があるんです。済みません、失礼します。
キスケさん、また後で！」

そう言つて食堂の方へ駆けて言つた。

「何あれ…てゆうか後でつて何？」

「ああ、飯時にな…」

「？…ま、そんな事はどうでも良いわ。私が聞きたいのはさっきの

ヤツよ！あれ何だったの！？」

そう聞かれた鬼助はジト目でルイズを見やる。

「だから言っただじゃねえか、剣さえありゃあ早々に負けはしねえよ。つか信じてなかったな？…まあ、良しさ。」

「だって、平民があんな…」

「ふう…、朧流開祖、朧夜千十が言っにはあ朧流こそ、天下無敵の魔刃剣。斬鉄なんか目じゃねえ、其れこそ無形のモンだろうが斬り伏せて見せらあ。」

「…どんな剣術よ？てゆうか剣術？」

「まあ、影の術も多分にあるからな、余所から見りゃそうも言われるか。」

この場合、影とは忍の技のみならず、方術や陰陽道などの要素も含む。

「ふーん。何か影とか良く判らないけど、あんたがそれなりに強いってのは判ったわ？」

「そうかい。」

嬉しさを抑えられないような表情で喋るルイズにぞんざいに相槌をうつ鬼助。

「…よしっ！ギーシュに勝った褒美よ！ご飯は用意してあげる。感謝しなさい？アルヴィースの大食堂で食事なんて平民には有り得ないんだから。」

「あゝいや、大食堂っていわれてもな？ありやしきたりがあるんだろ？」

「しきたり？…ああ、テーブルマナーの事？当たり前でしょ？って

そうか、あんた出来ないわけね？」

「そうなる。飯くれえ自由に食いてえからな。」

「そう、なら厨房の方に頼んでおくわ。あ、でもマナーは覚えなさい？あんたは私の使い魔何だから。」

「了解。ってーか昼から授業つての無いのかい？飯時から、二刻ぐれえ経つてると思うが？」「そうね、確かにそんな時間みたい。

じゃ、行くわよ。」

「応さ。」

そう言つて次の講義に向かうのであつた。

午後の授業は一年時のお扱いであつた。授業には、顔にガーゼを幾つも張り付けながらも問題なく出席したギーシュと、彼を支えるように隣に座るモンモランシーの姿もあつた。

授業は恙無く終わり、生徒達がそれぞれ立ち去る中鬼助に近付く影が一つ。ギーシュである。

「やあ、キスケ。僕は君に勲章を残せなかつたみたいだね？」

「あん？ああ、体を鍛えな？武家の出ならなおさらな。」

「フツ、耳が痛いよ。所で、君に聞きたいことが在るんだが、時間は良いかい？」

その言葉に、鬼助はルイズを見やりルイズは頷く。

「別に好いわ。まだ時間は在るし。」

「お許しがでたぜ。で、何の用だい？」

「有り難い。君は僕に三流と言つたね？確かに僕はドットメイジ、

青銅が限界だ。しかし、鍊金取り分けワルキューレには自信がある。

「

「うん、確かにあの鍊金の青銅人形は良いものよね。」

「有難う、ルイズ。そして、君に渡した剣はワルキューレに持たせているものと同じものだ。一体、何を持って三流と言ったんだい？」

「そう言うことかい。お前、鍛冶屋見たこと有るかい？」

「鍛冶？平民の？」

「ああ、あれ何度も叩く理由しってるか？」

「純度を上げる為だろう？鍊金は初めから望んだ物質を精製出来るから、そういった工程は要らないよ？」

その答に頷く鬼助は、更に言葉を繋げる。

「まあ、確かに純度は問題無いようだがな、問題は其処じゃねえ。

叩くことで地金に硬度としなやかさが両立するって事だ。」

「硬さとしなやかさが？それは初耳だ！？」

「一度、鍛冶師が打ったモン見て、それを目標にすりゃあ良い。地金の質が上がりゃ、性能は付いてくる。」

「なる程。」「後は、そうだな。武術を習いな。体の動かし方を知れば、お前さんが操る人形も其れだけ動きが増えるってもんだ。」

「そう、か。最初から魔法ありきでは駄目だと言っただね？」

「他はどうかは知らねえ、お前さんがその戦術を使っってんなら、その通りだ。」

その答えに満足そうに頷くギーシュ。

「やはり、相談して正解だった。これで、当面の目標が立ったよ。有難う、キスケ。」

そう言つて、ギーシュは去つて行つた。

「あんた、鍛冶もできるの?」

ギーシュとの問答を横で聞いていたルイズは鬼助に問う。

「いや、基本をちよいとな。とは言え本業には全く及ばねえ。」

「ホント多芸ね、アンタ。全部役に立ってないけど。」

「グッ……」

最後に止めを差すルイズであつた。

第一章 拾巻話

ギーシュとの問答の後、ルイズは自室で本日講義で出された課題を行っていた。

「えーっと、体力の簡単な治癒ではなく、傷などの外的要因を治療する薬品の種類は…と、そうだキスケ？あんた洗濯物何処にやったの？」

ふと、今朝渡した洗濯物を思い出すルイズ。

「え？…ああ、そんなモンも在ったな。」

「そんなモンって、あんたね。」

「いや悪い、すぐ取ってくらあ。」

そう言つて窓から飛び出す鬼助。

「昨日も思つただけど、ここ三階よ？…何でピンシャンしてるのよ、あいつ。」

「さてと…しえすたは何処にいるんだ？まだ食堂に居りや楽なんだが…」

そう言つて食堂に行き、厨房に顔を出すと、目聡く見つけたマルトーが喜色を浮かべてやって来た。

「おお！どうした、我らの剣！？皆、我らの剣が来てくれたぞ！！」
「…なんだい？その我らの剣つてのは？」

「お前さんは貴族じゃない、俺らの同朋だ。なのにお前さん、メイジに剣で勝っちまった！有り得ねえ、凄えよ、見たところお前さん、俺の半分と少して歳だろ？いや、若えのに、達人ってなモンで、敬意を評して我らの剣つつうことにしたんだ。」
「…そうかい、まあ好きに呼んでくれ。所でしえすたは居ないのか？」

そう言つて、キヨロキヨロと辺りを見回す。

「シエスタか？今、ホールの掃除を…つとちようどこっちに来たな。おい、シエスタ！我らの剣が呼んでるぜ？」

すると、食堂の方から布巾とバケツを持ったシエスタが駆けてきた。

「キスケさん！？どうしたんですか？」

「いやなに、今朝洗濯物頼んだろ？あれ取りに来たんだ。」

「そうなんですか？もう少ししたらお持ちしたんですけど。」

「む…、そこまでさせるのは…」

申し訳無さそうにする鬼助に、シエスタは言葉を繋げる。

「いえ、今日貴族様から庇って頂きましたから。それに元々、メイジの仕事何ですよ？だから大丈夫です。」

「そうかい？そう言ってくれるなら助かる。礼といっては何だが、何か出来ることはあるか？」

そう言われて考え込むシエスタをマルトーが後ろから肘でつついた。

「マルトーさん？…あつ、そうです！色々話を聞かせて下さい。何でも鬼助さんは東方の出身だとか、東方の方は皆さんあんなにお強

いんですか？」

「そんな事でいいのか？そうだな、みんなってこたあ無えよ。この力は借り物みたいなモンだが、その分そこらのモンにや負けはし無え。まあどうしようもない輩も居るがな。」

前世世界の最後に垣間見た神性の最高峰たる菩薩の姿を想い出しながら言う鬼助にマルトーがしゃべりかける。

「流石、我らの剣。言うことが大きいねえ。しかし、借り物つてのはどうゆうこつたい？」

「何、死人が棄てるのは勿体無いと言う。俺は力が必要だった。互いの利があつたんで貰い受けたのさ。」

鬼助の剣の腕は、魂を合わせる秘技たる、合魂の術により、朧夜千十から譲り受けたものであるため、まさしく真実を語ったのだが、魂を合わせるなど想像のつかないシエスタとマルトーは疑問を浮かべつつ、比喻の一つだと考えた。

「？…よくわからねえが、我らの剣。お前さんの力の目的ってのは何だつたんだい？」

「ああ、ちいと喋るのは恥ずかしいんだがな？」

「ええ？逆に気になっちゃいますよ、キスケさん！」

周囲のコックや使用人たちも頷いた為、鬼助はばつが悪そうに語り出す。

「何の事あ無え。惚れた女を助けるためさ。それ以上でもそれ以下でも無えよ。」

その答えに満面の笑顔を湛えたマルトーはなにを思ってたか、大声で

語り出した。

「判るっ、判るぜえ！！男ってなあ、そうじゃなきゃあいけねえ！みんな、聴いてたな？男は愛だ、我らの剣は、愛の剣士だ！！」

「……はいつ、我らの剣は、愛の剣士だ！！」「」

何を思ったか、マルトーの言葉を連唱する平民連合。
これには、鬼助も堪らない。

「なっ、おい！？止めろっ、阿呆みたいに恥ずかしいぞ！！」

「ああ、それも判ってる。みんな、男は易々と自分を誇らない！！」

「……男は易々と自分を誇らない！！」「」

「だかつ、やめっ、…エエイツ、しえすたあっ！洗濯物は何処だっ、外かつ、外だな？！よしっ、取りに行くぞ。じゃあな！！」

そう言つて、シエスタから洗濯物の場所を聴き颯爽と逃げ出す、鬼助だった。

「あゝえらい目に遭った。暫く、あそこ行くのやめるか？」

そう呟きながら、窓から飛び込む鬼助にルイズが尋ねる。

「ねえ、ここ三階なのよ？あんたどんな体してんのよ。」

「まあ、忍の訓練…と言うよりや、やつぱ臍だな。」

余談では有るが、例え訓練していない若い女性の体でも、朧流の理を持っては人外の身体能力を保有出来る。

「オボロねえ？…うん。」

「どうした？いきなり唸って？」

「まだ考えが纏まらないからいいわ。それよりもこんな時間か。」

外はもう闇に包まれていた。

すると、ノックが聞こえた。

「申し訳在りません。ミス・ヴァリエール、いらっしゃいますか？」

「誰？」

「メイドのシエスタと申します。」

「いいわ、入りなさい。」

「失礼します。ミスの使い魔の方が、お忘れになったものです。」

そう言うシエスタは手にショーツを持っていた。

「キスケ、あんた何忘れてんのよ？」

「済まねえ、慌ててたんだ。助かったぜ、しえすた。」

「いいえ、それでは失礼します。」

そうして踵を返すシエスタに背後からルイズが声を掛ける。

「待つて、今日は部屋で食べるわ。キスケの分も一緒に持つてきて。」

「畏まりました。」

今度こそ、シエスタは部屋を出た。

「持つて来いつて、ここで食うのか？食堂には行かねえのかい？」

「ええ、まだ少し考えたい事が在るのよね。あ、大人しくしてなさいよ？明日は休みだし、武器を買いに行つてあげるから。」

「本当か？ああ、わかつたぜ、静かにしてらあ。」

未だに、剣に執着はある鬼助は忠実に静かになり、静かな夜は過ぎていった。

尚、ルイズの部屋の前で主人の命をつけた火トカゲがウロウロしていたのは余談である。

第一章拾貳話

「さあ起きろ、嬢ちゃん！朝だ、武器だ、刀だ！！」

早朝、トリスティン魔法学院の生徒寮の一室を男の声が蹂躪した。

「ウルツサイわよ！！あんた、今何時だと思ってるの？！まだ、日が出たばかりじゃない！！」

あまりの朝の到来に部屋の主も只では済まさぬと怒るが、彼女の声も近隣の部屋の住民達に被害を及ぼしているのだが、そこまで頭が回っていない。

「うつ、いや、済まねえ。やっと剣が手に入ると思うと、な。

やっぱ丸腰ってなあどうも落ち着かねえ。」

「あんた：微妙に危ないこと言うわね？大体、お目当てのカタナ：だったつけ？それ、無いかもしれないのよ？」

「そんな事あ百も承知よ。この際文句は言わねえさ。」

喜色を浮かべる鬼助に苦笑を浮かべつつ言葉を交わす。

「全く：けど、行く前に仕事ちゃんとしときなさいよ？」

「ああ、洗濯だろ？早く出しな？」

「まだ着替えてないでしょ！！：後、あんた朝ご飯無し。」

「なっ、何い！」

「当たり前でしょ、無駄に早く起こしちゃって。」

「さてと、キスケ？あんた馬は乗れるわよね？」

朝食を採り終えたルイズ達は馬を借りて城下町へ行こうとしていた。

「おう、問題ねえ。」

基本、自分の脚で諸国を巡っていた鬼助ではあるがそれでも馬術はそれなりに扱える。

「あつそ、じゃあ問題ないわね。よしつ、行くわよ！」

そうして馬で駆けていくルイズ達を見やる一対の瞳があつた。

「あれって、ルイズと…馬を使うって事は、街に行くのね！全く、昨日はフレ임にダーリンを連れてくるよう頼んだのに…」

キュルケである。

昨晚、鬼助を閨に誘わんと使い魔を出したのだが、剣を欲する鬼助が静にしろというルイズの命を遵守せんがためにノックをしていたフレ임을追い払っていた為、フラグは見事にへし折られていた。

「ルイズのクセに、休日にダーリンとデートなんて！なんとか追いかけていけど、今からいつても追いつかないし…うゝん」

考えるキュルケの脳裏に親友の使い魔が思い浮かぶ。

「っ！たしか、タバサの使い魔が風竜だったはず。」

思い立ったが吉日と駆け出すキュルケは、親友の部屋に飛び込んだ。
「タバサっ、お願いがあるのっ！あなたの風竜の力が必要なのよ！」

突然部屋に侵入してきた数少ない友人の声に何事かと読んでいた本

から視線を外す。

「ダーリンがルイズとデートみたいなのよ！急いで追いかけなきゃ！！」

「…今日は休み。」

「分かる、分かるわ。あなたがゆっくり読書がしたいってゆうのは当然よ？」

「ん…」

「でもね？私の微熱が、その理解も溶かしてるの！それに貴方もダーリンの事じつと見てたでしょ」

「…、シルフィード！」

キュルケの勢いに圧されるように窓から己の使い魔を呼び出すタバサ。

実際、キュルケの言う通りタバサは鬼助に興味があった。

ただの平民でありながら身のこなし、剣速いずれも尋常の沙汰ではない。

何らかの技法であるのなら己の目的の為にもなるのである。

「有難う、タバサ！いつ見てもあなたの風竜は立派ね？」

「ん…シルフィード、馬二頭。食べちゃダメ。」

その言葉に二人を乗せた風竜は空を駆け出した。

「さて…と、破魔の剣か。宝物庫にあるのは分かっちゃいるんだけどね。」

そうばやくロングビル。ライブラリ前で呟く彼女の前に輝く頭のコ

ルベールが現れた。

「おや、ミス・ロングビル。調べものですか？な、何ならお手伝い致しますぞ？」

「え、ええ、少し気になる事が…」

微妙に下心丸見えなコルベールに少し引き気味のロングビルであるが、気を取り直して言葉を繋げる。

「最近、盗賊が騒がれています。大丈夫だとは思いますが学園の宝物が狙われる場合が無いとは言えません。ですので、宝物庫の安全面について調べようと。」

「はあ、仕事熱心ですな、ミス。しかし、そう言う事ならば問題ありませんぞ。」

宝物庫は元々が非常に頑丈に造られて居りましてな？生半の魔法ではどうにもならないのです。更に、強固な固定化も掛かって居ります。

「

「成る程、では防備は完璧だ…と？」

「ふむ…まあ、並みの事では破れますまい。あるとすれば、強烈的な物理的衝撃と言った所でしょうか？平民の兵士が使う破城槌のような。」

「ああ、確かにそれなら普通のメイジでは思いつかない発想ですね。有難う御座います。ミスタ・コルベール。」

そう言って、不思議な笑みを浮かべてロングビルは立ち去った。残ったのは、寂しそうなコルベールのみである。

「着いたわ。ここが大通りよ。」

城下町に到着した鬼助とルイズは馬を降り徒歩で大通りを歩いていた。

「ほお、石造りかい。見事なもんだ。」

「当たり前でしょ。それと、あんまりキョロキョロしないで！恥ずかしいじゃない。」

「ああ、後スリに気をつけて？魔法を使うから油断したらアンタでも何か盗られかねないわよ？」

「魔法？スリが魔法って…なんだ、こつちじゃ貴族は盗みの真似事もするのか？」

「なわけ無いでしょ。所謂没落つてやつ。メイジの盗賊に傭兵、色々居るわよ。つと、ピエモンの秘薬店の裏だから…あつたあつた此処ね。」

そう話つつ着いた場所は些か薄汚れた看板が哀愁誘う武器屋である。

「…いや、まあ買つて貰う手前文句を言える立場じゃねえが、ちいと寂れてやないか？」

武具はピンキリであるが高価な代物は下手な屋敷より高い物も時にある。

そうなると必然、店構えも立派になるものなのだがこの店はお世辞にも立派とは言い難かった。

「は？…あんまり利用しないから判んないけど、武器屋なんてこんなモンでしょ。平民しか使わないし。」

「あ、あゝ成る程なあ。こつちにや魔法で事足りるわけだ。」

「そゆこと。さて、店主はいるかしら？」

そう話つつ門を潜ると店の者と思しき男が声を掛けて来た。

「へい、いらつしやいませ。…こりゃあ、貴族様。あつしは真つ当な商売をしてまさあ。」

愛想笑いを浮かべつつ話しかける店主に言葉を返すルイズ。

「客よ。」

「客？…貴族様が剣をお振りになる？」

「違うわ。振るのはコイツ。」

そう言つて鬼助を前に押し出す。

「ああ、成る程。最近はお僕に剣を持たせる事が貴族様の流行りのようで。」

「？…流行り？どうして？」

「へえ、何でも貴族様ばかりを狙う土塊なる盗賊が居るようでしてコイツを恐れて平民の下僕にも武器を持たせているのです。」

「ふゝん、盗賊ね。まあいいわ、それより良いものある？カタナなんて有るなら良いんだけど…」

「カタナ…ですかい？確か東方の武器でしたか？ふむ…、残念ながら扱つてはおりません。それよりも…、ちよつとお待ちください。」

そう言つて裏に引つ込む店主。

「ふう、やっぱり無いみたいよ？どうする？他の買う？」「そうさな、刀が無いなら仕方ねえ。何とか使い勝手の良いモンでも探すか。幸い片刃のモンも在るみてえだしな。」

そう言つて漁ろうとすると、店主が大きな包みを持って出てきた。

「お待たせしました。此方など如何でしょう。かのゲルマニアの名工シユペーによる逸品。」

魔法も掛かつておりますので、鉄をも一刀両断でさあ。」

言葉と共に広げられた包みには煌びやかな剣があつた。

「へへ、良いじゃない。どうするキスケ？これにする？」

ルイズの言葉にチラツと剣を一瞥するが、直ぐに興味を無くしたように、武器を漁り始めた。

「ちよつとキスケ？！人が聞いてるでしょ？！」

「はあへ、飾りモンに興味は無えや。」

「飾り物？…是が？」

「んな？！ちよつとまつたお客さん。その言葉は聞き捨てならねえ！どういうこつた？！」

「どうもこつも無えよ、振れない事も無いがな。そいつじゃ斬るつつつか潰し斬るってしろもんだ。どうもあわねえ。それに見た感じ、鉄の練りがたらねえ。」

鬼助がそう語ると、どこともなく声が聞こえてきた。

「ハツハツハツ、おいオヤジ、ソイツの言つとおりナマクラ売りつけるのは感心しねえな！」「っ、誰っ？！」

「テメエ、デル公！だまりやがれ！！」

ルイズが驚き、店主は怒る。鬼助はその原因を店の隅から引き抜いた。

「コイツか？…これは！？」

「剣が喋った？…インテリジェンスソード？」

「へえ、どこの誰がこんな事したんだか？ボロい上に五月蠅いから
買い手が見つからないんでさ。」

確かに店主の言うとおりボロかった。刀身には錆が浮かんでいる。
しかし…

「間違いねえ、拵えは、コッチ風だがコイツは刀だ。はっ、運がい
いな、こいつは。」

「ええっ？コレがカタナ？でもボロいわ？」

「ボロいボロいいうんじゃねえよ嬢ちゃん。俺はこれでもそっちの
ナマクラよりは切れるぜ？…しかし、アンタ相当な腕だな？更に使
い手と来た。決まりだ、アンタ俺を買いな。」

「ふん、言われるまでもねえ。嬢ちゃんコレを買いな？」

「アンタら、揃って嬢ちゃん嬢ちゃん言うんじゃないわよ！全く、
それでいいのね？…おいくら？」

「へえ、そいつなら100で結構でさ。」

そうして、鬼助はこの世界で初めての佩刀を手に入れた。

尚、この武器屋、次の二人連れの貴族に先程の剣を半額近くまで値
切られて買われるがあくまでも余談である。

第拾参話

「で、ホントーにそれでよかったの？カタナがそれしか無かったとはいえ錆だらけじゃない。」

此処はトリステイン魔法学園。

鬼助の刀を用立てしたのち帰途につき、現在は既に夕刻である。

「あん？ま、そうだな。確かにコイツがただのボロい刀だったんなら流石に選びやしねえ。俺の勘からすりゃあコイツあ中々の代物の筈だぜ？なあ、でる公。」
「応よ、何せ俺は六千年存在してる魔剣デルフリンガー様だからな！」

「いや、この場合六千年とか関係無いで…六千？！始祖ブリミルの時代じゃない！！」

「あん？ブリミル？…何か懐かしいような…」

「ッ、アンタ…まさか…」

「…ダメだ、思い出せねえ。」

「ちよっ、アンタねえ！？」

デルフの思いがけぬ台詞に驚愕するが、結局何も思い出せないデルフに苛立ちながらも、実は掘り出しモンじゃね？と内心考えるルイズであった。

「まあ、六千年とか関係なく見た目ボロいがきちんとした刀だ。このままでも斬鉄だつてしてみせるぜ？」

「そう？期待してるわ。いずれ使い魔の品評会があるだろうし。」

「品評会って…「ダーリン」…何だあ？」

突然の声に上空に目をやると一匹の風竜が降りてくる。

「あれって、確かタバサの…ってツエルプストー?!」

「ハアーイ、ダーリン逢いたかったわ!」

「…ツエルプストー、何か用?」

「んふふー、いえねえ愛しいダーリンにプレゼントしようと思って。」

「プレゼント?」

「そープレゼント!!タバサ、お願い。」

その言葉にタバサが竜の背から重そうに包みをおろす。

「見て、ゲルマニアが誇る逸品よ!ヴァリエールが買い与えた錆びた剣なんかとは話が違っわ。」

そこには、シュペー某の剣があつた。

「話が違っってツエルプストー…、流石成金見た目にしか目が行かないのね?」

鬼助とデルフにこの剣の価値を教えられたルイズは、ここぞとばかりに言葉を紡ぐ。しかし、当然と云うべきキュルケはルイズの言葉を負け惜しみとして受け取った。

「あら、ルイズいくらその錆びた剣しか買って上げられなかったからって僻みは良くないわ?」

「ひ、僻みイ?!冗談でしょう?これはキスケが之が欲しいって言うから買ったのよ!」

「ああ、ダーリン可哀想。主人が不甲斐ないから我慢するなんて。」

「不甲斐ない?我慢?!アンタねえ!!」

売り言葉に買い言葉、あっという間に口喧嘩になる。

更に、あれよあれよと実力行使に。

「決闘よ!!!」

「つて、オイ!？」

余りの展開の速さに突っ込みを入れる鬼助。
しかし、兩人共もはや聞く耳を持たない。

「それで、ルールは？」

尋ねるルイズに、答えるキュルケ。

「簡単よ。貴族らしく魔法で勝負、あの塔にお互いの剣を吊してどちらが先に落とせるかで決めるの。」

「ふん。いいわ、早くやりましょ!」

「ふふん、まあやる前から決まりきっているけれど。タバサ、この剣吊して来てくれる？」

「フウ、…やることが多い。」

「ゴメンゴメン。今度本でもプレゼントするわ?」

「ん…、約束。」

そうして再び、風竜は飛び上がった。

「つて、ウオイ!？俺の意志は？デルフリンガー様の危険はーっ
!!--!」

「諦めな、でる公。こうなったら止められねえ。往生しな?」

「相棒ー!ーッ!?!」

「さあて、準備できたみたいね？風もないし。」
「そうね。で、どうするの？」

既に宝物庫の塔には吊された二本の剣がある。
一本は未だに騒いでいるが。

「やるわよ、ルイズ。条件を同じにするためにも、同時に魔法を使う。結果、剣を先に落としたほうが勝ちってわけ。」
「いいわ、やるわよ！」

そう言って互いに集中し、

「いくわよ、キュルケ！」
「ええ、いつでもいいわ！」

「「ファイヤーボール」」

果たして、放たれた火球はロープを焼き尽くし、突如起こった爆発は、塔の外壁に亀裂を入れるに終わった。

「ふふん、どうやら私の勝ちみたい。まあ、判りきった結末だけどね？」

「ムキーツ！！！！」

「ツ、塔から離れる！！」

「「ツ！？」」

鬼助の珍しく切羽詰まった声に振り向くと、其処には塔に悠々と近付いてくる巨大な人影が有った。

「ッ、ゴーレム！？」「」

ルイズ達が決闘を始める数刻前、宝物庫の前にロングビルの姿が有った。

「はあ。何が破城槌だ、あのハゲ。こんなに頑丈なもの、火の秘薬ありったけ使ったとしても、壊せないじゃないか。」

彼女こそ、巷を騒がす盗賊フーケである。彼女の扱う土系統の魔法は他の系統を圧倒する質量が有る。宝物庫を破るため、様々な魔法を試しはしたが、彼女の有する如何なる魔法も壁を貫く事は適わなかった。

「はあ、諦めるべきかね、コイツは。」

そう呟いた時である。

「決闘よ！！」「」

かん高い声がフーケの耳に届いた。

「何だい、貴族の小姑娘かい。まあ、そんなのどうでもいいわ。それよりなんとかならないかねえ。」

そう考えるフーケ。

暫く考え込んでいると轟音、フーケにとって福音となるものが聞こ

えた。

「ツナンだい！？…マジかい。だが、コイツは好機だね。」

フーケの見やる方向には、如何なる方法か塔に亀裂が走っていたのだ。

「あの一点を大質量で叩く。行きな、ゴーレム！！」

そう言って己の作り得る最大のゴーレムをけしかけた。

第一章拾四話

「ッ、デケえな。土の妖魔か?!」

鬼助達一行の前に存在する土人形の大きさは、眼前の塔と同じくらいだろうか。

大きさだけなら、今まで鬼助が戦った化け物で匹敵するのは富士の龍神ぐらいではなからうか。

「妖魔じゃなくて、ゴーレムよ!!」 「ゴーレム、土系の魔法による擬似的な使い魔の構築。あれほどの大きさは最低トライアングル、場合によってはスクウェア級。」

鬼助の言葉に訂正を入れるキュルケと、説明するタバサ。彼女達はいつの間にか、風竜に乗り低空で待機していた。

「って、あんたらいつの間にも!」

竜の口にはルイズがくわえられていた。

「暴れないでよ?そして、感謝なさい。あれ、噂のフーケじゃないかしら?ただのこそ泥にしては、強力過ぎる。放っておいたらあなた、突撃しそうだもの。」

「五月蠅いわね!?第一、貴族が泥棒如きに、逃げるなんて恥だわ!!」

くわえられたまま大声で叫ぶルイズ。

そういつている間に、ゴーレムは塔に接近。

拳の一撃で穴が開いた。

「嘘でしょ…。宝物庫の壁、かなり頑丈だったはずなのに。」
「あつ、人が中に！」

見れば、ゴーレムの肩にいたのだろう。壁をぶち抜いた腕を伝って、人影が塔に侵入した。

「キスケー！あんた、あれ斬りなさい！！！」

「ちよつと、ルイズ。頭大丈夫？いくらダーリンが凄腕の剣士でも、あれは切れないでしょ、フツ…、ってダーリンどこ行くの？！」

鬼助はルイズの号令の下既に走り出していた。

鬼助は忍として生きてきた。基本的には命令には忠実でなくば、忍は生きていけない。故に考慮の余地などない。

「チツ、時間がねえ。でる公とるより、あのナマクラ使った方が速いつー！」

そして、幾多の妖魔を切り捨ててきた鬼助にとって、ただ大きいだけの人形など、一考にも及ばない。

途中、落ちている大剣を拾いつつ更に加速。

白の斬光を尾に引き、土人形の反対側へ宙を翔る。

その速さたるや、ギーシュ戦の際など問題にならぬ。

朧流奥義、天地一閃。

果たして、フーケのゴーレムは上下を分断されていた。

「うつそ…、冗談でしょ？なにあれ。」

「…」

「良しっ！！流石私の使い魔。」

三人娘は三者三様、呆然としたり興味深い視線を送ったり、無い胸を反らしたりしている。

「クソっ、やっぱ一太刀保たないか。」

言う鬼助の手の中には、半ばからへし折れた、大剣が在った。ギーシュの剣同様、朧流の奥義に耐えられないのだ。

「とは言え、まともに切り結ぶにや、矢張り強度も切れ味も足りやしねえ。」

「だゝッ!! 相棒、何で俺を使わねえ?! 俺ならフツーに切り結ぶ! まだだ、相棒!」「なっ! まだ動け…、無傷だと?!」

振り向く先には、何ら変化の無いゴーレムが拳を振り上げていた。

「確かに斬ったぞ!! どうなってやが グヌッ!？」

振り下ろされた拳は鬼助を防御ごと吹き飛ばし、塔に叩き付けた。

「キスケっ!？」

「相手はゴーレム。真っ二つにした程度なら、幾らでも再構築出来る。」

「ちよつと、どうしようかしら。私達じゃ有効な手は…あれは、フーケ?!」

既に仕事を成したのだろう、フーケとおぼしきローブの人影が現れ、ゴーレムを伴って去っていく。

「これは…、見逃してくれたのかしら？」

「相手は盗賊。目的が済んだ以上長居は無駄。」

「ま、そうよね。」

「ちょっと、キスケは？！ってゆーか、これどうなるの？泥棒風情を逃がしちゃった。」

「ダーリンは、大丈夫みたいよ？ほら、今立ち上がったわ。」

キウルケが指差す先で、鬼助は頭を抑えながら、立ち上がっていた。

「おい、相棒。無事かい？えらい勢いでぶっ飛ばされたみてーだがよ？」

「っ痛あ、くそっ！なんだありや、変わり身でも使ったのか？！」

「いんや、ありや再生に近いな。斬った断面でくっ付きやがった。

ま、ゴーレムだしな。」

「馬鹿言うな。前そのごーれむとかつてのとやり合ったが、再生なんぞしなかったぜ？」

「そりやメイジのランクがしょぼい奴だったんだろ？高ランクのメイジにとつたら、再構成は難しくない。

まして、相棒の切り口はえらい綺麗だからな。ぴったりくっ付いたろうよ。」

「何い？じゃあどうしろってんだ。」

「簡単なことだ。あれほどのゴーレム、早々造れたモンじゃない。連続では造れねえさ。

つまり、一からやり直さなきゃならねえぐらいにばらっばらにしてやりゃいいんだ。」

「ほう、なるほどな。」

「ま、本来あのゴーレム潰すにや、スクウェアクラスの魔法が、相当量の火の秘薬が要るんだが、相棒にや必要ねーだろ？」

「はっ、驚いた。でる公、お前判るのか？」

「あたぼつよ！！俺様を何だと思ってやがる。」

「なら、次は期待してるぜ？つと、嬢ちゃん達が来やがった。と思えばあつちからこるべーるも来たな。」

「あんだけ騒音出してりや、そりやなあ。」

合流した鬼助とルイズ達は、現場に駆けつけてきたコルベールに報告すると、学園長室へと連れてこられた。

その場には既に、各教師達が集合しており、その場で再度説明をさせられたのである。

「ふむ。賊はトライアングル以上と考えられるメイジ。宝物庫から盗まれたのは、コルベール君の報告によれば、破魔の剣。ご丁寧に、フーケの名と共に、頂きましたとメッセージカードが置いてあった。舐められとるの。」

「今日の当直は何をしていた！怠慢だろう！！」

オスマンの台詞に呼応して、教師が声を荒げる。

「そ、それは…異変に気付き動いた頃には、既に事は済んでいたのです。」

それに答えたのは、シュベルズである。

どうやら彼女が係だったようである。

実際、フーケがゴーレムを用いて逃げるまでに要した時間は、5分にもみたない。

部屋から、直行しても間に合わなかったのである。

「ミスタ・ギトー。確かに、シュベルズ先生にも問題はあるが、それをいえばこの場にいる何人が当直をきちっとこなしておる？

これはそういった空気を作ったワシの、そして皆の問題なのじゃよ。

「

「う、む…。確かにそう、ですな。」

「そう、そして直ちに取り戻さねばなるまい。誰か我こそはと思う

ものはおらぬか？」

その言葉に、周囲に動揺が走る。

「オールド・オスマン?! 城に連絡をいれないのですか？」

「無論、連絡はする。ただし、奪取してからじゃ。でなくば、魔法学院の権威は地に落ちるぞ。この学院は国にとって一種の要なのじゃ。」

いざという時の発言の力を持っていなくばならん。

故に、今回は是が非でも我々で対処せねばならん。

誰ぞ、我こそはという勇者は居らんのか?!」

その言葉に呼応するかの如く一つの手が上がるが、しかし。

「ミス・ヴァリエール?! いけません。何を考えているのですか?!」

手を挙げたのはルイズである。

しかも、続いてキュルケとタバサも手を挙げる。

「君達!! 何を考えている?! これは生徒がでる問題ではない。」

「ですが! 誰も手をお挙げにならないではありませんか!!」
ならば、私が参ります。」

「私はミス・ヴァリエールが出る異常、引く訳には参りませんので。」

「二人が心配。」

それぞれの意見を述べ堂々としている彼女たちに皆言葉を返すことができない。

「ふむ。ならば行けるかの？僕は立場上早々動くわけにはいかんし、大人はこの通りじゃ。援護は期待出来んぞ？」

「問題ありません。」

「ふむ。ならば行きたまえ。」

「オールド・オスマン?!」

「だまらっしゃい。儂とて考えなしに彼女達に頼むわけではない。それとも君が行くかね？ミス・シュベルズ。」

「それは…。」

「確かに、ミス・ツエルプストーはゲルマニアに名高き火の一族。彼女自身トライアングルの優秀なメイジ。ミス・タバサはガリアにて、シュバリエの称号を持つ。ミス・ヴァリエールは…、えゝ優秀な家系で、学業も高く、あゝ、そう！使い魔はガンダツ、ごふつ、んんつ、強力でフーケのゴーレムを一度は倒したようで…。」

「うむ。皆強力なメイジじゃ。そうそう遅れは取らん。皆出来るな？」

「はい！勿論です。」

「良し。後はフーケの行方か。ミス・ロングビル。周囲に目撃者がいないか聞き込みをつて、ミス・ロングビル？おらんのか？」

「そう言えば、見あたりませんね。一体…。」

各々周囲を見回していると室内に当のロングビルが駆け込んできた。

「報告します！！近くの農民が学院の方から駆けてくる不審な黒ずくめの男をみたようです。どうやら空き屋に潜伏しているようです。」

「

「でかした！！流石じゃな。仕事が早い。」

「恐縮です。馬車も用意してあります。」

「うむ。では4人共気をつけるのじゃぞ。」

「キスケ君、彼女達を頼みます。」

コルベールは鬼助の手を握りしめ強く言った。

「ああ、任せな。しかし、あんたは出ないのか？出来るだろ、相当。」

「！？…出来るのと、するのは違います。私は…。」

「ああ、別に深くは問わないさ。生きてりゃ言いたくないことも出来る。」

「キスケーッ！！早く来なさい！」

「つと、嬢ちゃんがお呼びだ。じゃな。」

（キスケ君。…有り難う。どうか、彼女達を頼む）

第一章拾伍話

一行は既に馬車に乗り一路、フーケが潜伏していると思われる空き家へと進んでいた。

既に日は完全に落ち、月が煌々と周囲を照らしている。

「善し。いい感じに月が出てらあ。」

鬼助の言葉に首を傾げるキュルケが問う。

「？ね、ダーリン。こうゆうのは暗闇の方が良いんじゃないの？
こう、闇の中でササーッて。」

「まあ、其れが理想つつたらそうなんだがな。」

この面子でそういったことが出来るのは、俺かたばさぐらいだろ？」

「む。まあ、私にはそうゆうコソコソしたことは合わないから。」

「あら、会わないんじゃないで出来なんでしょう、ルイズ？」

「う、五月蠅いわね！あんだだつて出来ないでしょ、キュルケ！？」

「落ち着けよ、嬢ちゃん。それに出来たとしても早々に上手くは行かねえさ。」「？何だよ。そしたらパパッと済むでしょ？」

「そうでも無え。単独ならいざしらず、集団で動くのなら相当な錬度がある。一朝一夕で出来るもんじゃ無えさ。」

「ふうん。そんなもんなんだ。」

会話がそこで途切れるが今度はロングビルが鬼助に問い掛けて来た。

「失礼。キスケ殿、でよろしいでしょうか？家名は無いようですし。」

「別に、鬼助って呼び捨てでかまわねえよ。殿なんて久しく言われたことねえから背中がムズムズしやがる。」

「分かりました。では鬼助さんで。」

鬼助さん、あなたは随分とそう言う事に詳しいようですが、御経験が有るのですか。」

「ん？まあ、嬢ちゃんには話してあるし今更隠すわけでも無えからな。」

俺は髑髏谷の忍里、まあ、間喋の集落生まれだからな。」

「成る程、ならばフーケのゴーレムを斬ったとゆう技もそういった類のものですか？隠してあるマジックアイテムを利用しているとか。」

「いや、まじつくあいてむってのが何の事指すのかしらねえが、ありや剣技だ。」

「そう、ですか。」

「？何か気になる事でもあるのか？」

「い、いえ、ただ此方の戦力を考えていたもので。」

その言葉にキュルケが応えた。

「戦力、ね。ミス・ロングビル？貴女もメイジよね。どれぐらいのものかしら。」

「ミス・ツエルプストー。私は貴族では在りません。戦えるほどのものでも在りません。」

「あら、そう言う事言われると気になるわね。」

「キュルケ、止しなさい。不作法が過ぎるわ。誰にでも言いたくない事ぐらいあるでしょう。」

「何よ、戦力確認よ？必要でしょ。」

「フン、じゃ何かしら？ミス・ツエルプストーは不安なのかしら？」

「なッ、いつてくるじゃない。戦力にもならないゼロの癖して。」

「何ですってえ！？」

「・・・ふう、騒がしい。」

パタン

姦しい二人の声にタバサは本を読むのを止めた。

馬車は既に街道を越え目的地の目の前まできていた。

「見えて来たわね。あれがそうかしら？」

ルイズの視線の先に木造の小屋があった。

「うーん、他にそれらしいのは無いみたいだし…あれでいいのかしら、ミス・ロングビル？」

「ええ、あれで間違い無いかと。」

「じゃあ、作戦を決めましょう？」

とは言っても大体取れる手は絞られてるんだけどね。ダーリンは先行、私とルイズが此処で待機、タバサは、空から監視って所かしら？」

「まあ、妥当だな。独りの方が動きやすい。」

「キスケ、下手打つんじゃ無いわよ！」

「はっ！誰に言っただけであー！」

そう言う間という間に小屋に接近、侵入する。

「さっすが。速いわね、盗賊も真つ青。」

慎重に気配を探りつつ小屋に侵入する鬼助。

「あん？おかしい…入口にすら鍵が掛かって無え。罨…でも無えな。おかしな気配も…、この気配は！おい、でる公解るか？」

「いや、俺に聞かれても、剣だし…。」

「チツ、使えなえ。」

「うおい、ひでえな相棒。そりゃ無いぜ？つて…おい相棒、あれじゃねえか？」

ガランとした屋内にあるテーブルの上に一振り、鎖で雁字搦めにされている剣があった。

「…、なるほどな。しかし、コイツが破魔？冗談だろ？」

「相棒、コイツアちいとばかり不味くないか？」

「ああ、普通は迂闊に抜いていいもんじゃ無え。…とは言え、此処で考えても仕方がない。とりあえず、嬢ちゃん達と合流するか。」

「あ、ダーリン出てきたわ。何か持つてるみたいだけど…」

「あれが破魔の剣かしら？」

そう言いながら、二人は鬼助に近寄る。

「キスケ、フーケは？」

「中には誰もいなかった。あつたのはこいつただけだぜ。」

そう言つて左手に持った鎖の塊を見せた。

「なにこれ…？これじゃ抜けないじゃない。」

「待つてルイズ。これ、何かわからないけど、魔法みたいな力が掛かつてる。系統じゃないわ…コモン？違う、何これ？

封印系の力みたいだけど…」

剣にディテクトを掛けるキュルケだが、魔法とは異なる封印に考え込む。

しかし、考えは途中で止められる。タバサの珍しく大きく切羽詰まった声によつて。

「後ろっ！！」

「えっ…、なっ！？」

果たして後ろには、件の巨大ゴーレムが拳を振り上げ、今にも此方を叩き潰さんとしていた。

「チイツ！…おい、きゆるけっ！無事かつ！」

すぐ近くにいたルイズは抱えることが出来たが、キュルケは掴む事が出来なかった。

「こつちよ、ダーリン！」

しかし、杞憂であつたか。

キュルケはタバサの駆る風竜の背に乗っていた。

「へっ、流石。おい、嬢ちゃん！一旦下がるぜ！」

「下がる？冗談じゃないわ！盗賊風情に下がるなんて有り得ない。決して背中は見せない、それが貴族と言うものよ！！」

そう言うこともあろうか、その場で魔法を唱え始める。

「馬鹿か！？嬢ちゃんじゃ無理だろ？頭使えっ！！」

「馬鹿は貴方よ！！貴族とは決して引いてはいけない。ましてや、盗賊なぞにはっ！！」

「テメエのそれは勇氣でも誇りでもねえ！！ただの蛮勇だ！！命の無駄遣いにも程があるっ」

「じゃあどうしろって言うの？！大人しくしつぽ巻いて逃げろって言うの？」

「そうだっ！！」

「なっ！あんたっ！！」

「黙ってる！！お前は何のために俺を喚んだ？俺は此奴しか知ら無え。だから、お前は一つ言えば良いんだよ！」

そう言うて雁字搦めの剣を突き出した。

「あんた…、さっきは倒せなかったじゃない。」

「知らなかったただけ。それに先方が逃げちまったしな。」

「出来るのね？」

「ああ。」

「なら、さっさと終わらせなさい。アナタの魔刃剣とやらで!」

「応っ!」

応えは一言。

一瞬でルイズの傍からゴーレムの懐へ。

雁字搦めの剣、否、封印の施された太刀に手を掛ける。

硝子の割れるような音と同時に鎖は砕け、抜刀。

剣閃は縦横無尽に疾り、ゴーレムを切り刻む。

妖刀に秘められし霊力を利用した朧流の真骨頂たる居合い。

続けて刀を脇構えに下ろし、切り上げ。

剣戟は赤光を帯び月へと昇り、土の塊を更に小さく砕く。

朧流奥義 月天輝夜

正に瞬きの間に、巨大なゴーレムは使い手の二つ名の如き土塊となり地に降りそそぐ。

「嘘…、いくら何でも…」

「凄い。」

「フン。言うだけやるじゃない。」

三者三様、思いを別に鬼助の下へ寄って来る。

其処へ唐突にロングビルが近寄り、ルイズの後ろへ。

「ご苦労様です、キスケさん。素晴らしいですね。流石は破魔の剣、と言ったところでしょうか？」

「ミス・ロングビル？」

「訳の分からない封印のせいで全く抜けなかったからね。困ってたんだ。」

「まさか…、あなたが?!」

「そう、私がフーケってことさ。それじゃその剣コッチに渡しな？」
言葉と共にルイズの首に腕を絡め、頭に杖を突きつける。

「止めといた方がいいと思うがな。」

そう言って刀を地面に突き刺し後ろに下がる。

フーケはルイズを捕らえたまま、刀に接近。
そのまま持ち上げる。

「そう、コレが、破魔の剣。いいわ、とっても綺麗…」

「嬢ちゃんっ!!」

「ッ!」

剣に夢中なフーケから、隙を突いて逃げ出すルイズ。

「ちょっと、何あれ？」

何か目が…、アブナいわよ？」

「そりやそうだろ。さっき振ってはつきりした。未完成だが間違いねえ、ありや千子村正に連なる代物だ。」

「ムラマサ？それって、アンタが使ってたって言った…魔、剣？あの超物騒な？」

「ああ。」

「未完成って、キチツとしてると思うけど…？」

「器としてはな。だが、器の質に霊格が付いて行っていない。だから…、」

「嫌な予感がするわ。…だから？」

「霊魂を求める。具体的には…」

「いいわ、大体分かって。フーケ見たら分かった。詰まり…、」

「…人を操り、血を求める！！」「…」

其処には、半笑いを顔に貼り付け左手に妖刀、右手に杖を構えたフーケが仁王立ちしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1761h/>

ゼロの使い魔 ～異世界朧剣忍法帳～

2010年10月21日21時19分発行